

IBM Rational Developer for System z
バージョン 9.0.1

インストール・ガイド



IBM Rational Developer for System z
バージョン 9.0.1

インストール・ガイド



お願い

本書をご使用になる前に、67 ページの『IBM Rational Developer for System z の特記事項』に記載されている全体的な情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Developer for System z バージョン 9.0.1 (プログラム番号 5724-T07) および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GI11-8297-09

IBM Rational Developer for System z

Version 9.0.1

Installation Guide

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.11

© Copyright IBM Corporation 2000, 2013.

目次

表	v
---	---

本書について	vii
--------	-----

本書の対象読者	vii
---------	-----

Developer for System z についての詳細情報の入手先	vii
--------------------------------------	-----

IBM Rational Developer for System z インストール・ガイド 1

第 1 章 Developer for System z の概要	3
プリインストール作業	3

第 2 章 クライアント・インストール要件 5

メディア要件	5
追加オフラインのメディア	6
ハードウェア要件およびソフトウェア要件	6
Developer for System z のクライアント前提条件	6
ハードウェア要件	7
ワークステーションの前提条件	7
オペレーティング・システム	7
開発用ホスト環境/仮想化サポート	9
ワークステーションの相互必要条件	9
TXSeries for Multiplatforms	9
DB2 Connect	9
Web ブラウザー	10
Adobe Acrobat Reader	10
ユーザー特権の要件	10

第 3 章 インストールの計画 11

インストール方式	11
インストール・ディスクからのインストール	11
電子イメージの使用	11
電子イメージの解凍	11
ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール	12
共用ドライブ上の電子イメージからのインストール	12
HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール	12
フィーチャーのインストール	12
Developer for System z のフィーチャー	13

第 4 章 IBM Installation Manager 17

Installation Manager のインストール	18
Installation Manager の開始	20
アンインストールと Installation Manager	21
Installation Manager の使用	21
インストール・リポジトリ	21
Installation Manager でのリポジトリ設定	22

パッケージ・グループと共用リソース・ディレクトリ	22
パッケージ・グループ	22
共用リソース・ディレクトリ	23
既存 Eclipse IDE の拡張	23

第 5 章 Developer for System z のインストール 25

インストール作業の要約	25
概要: インストール・ディスクからの Developer for System z のインストール	25
概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール	26
電子イメージからのインストール	26
概要: 共有ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール	27
概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール	28
概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置	29
ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール	29
Installation Manager を使用した Developer for System z のインストール	31
サイレント・インストール	35
共用ドライブまたはサーバーへのインストール・イメージのコピー	35

第 6 章 ポストインストール作業 39

ヘルプ・コンテンツの構成	39
EXEC CICS、EXEC SQL、EXEC DLI の各ステートメントのコンテキスト・ヘルプを有効にする操作	39
Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールと初期化	40
CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターのインストールと初期化	41
管理、ライセンス	41
許可ユーザー・ライセンス	42
フローティング・ライセンス	42
トークン・ライセンス	43
ライセンスの使用可能化	43
アクティベーション・キット	43
フローティング・ライセンスの適用	44
インストール済みパッケージのライセンス情報の表示	44
製品アクティベーション・キットをインポートする	44
フローティング・ライセンスの使用可能化	45
ライセンスの購入	46

ライセンスのサイレント・インストールおよび 設定	47
Linux コンピューター上でのファイル・ハンドル数 の増加	47
Linux オペレーティング・システムの追加構成要件	48
第 7 章 Developer for System z の開 始	51
第 8 章 インストール済みパッケージの変 更	53
第 9 章 インストール済みパッケージの更 新	55
第 10 章 Developer for System z のア ンインストール	57
第 11 章 マイグレーション	59
WebSphere Developer for zSeries または WebSphere Developer for System z ワークスペースのマイグレー ション	59

第 12 章 追加ソフトウェアのインストー ル	61
必要な System z コンポーネントのインストール . .	61
IBM TXSeries for Multiplatforms のインストール . .	61
IBM Data Studio のインストール	61
Rational Team Concert Integration for System z 拡張 機能のインストール	62
第 13 章 既知の問題および制限事項 . . .	63
第 14 章 IBM Packaging Utility	65
IBM Rational Developer for System z の特記事項	67
著作権使用許諾	69
商標の帰属表示	70
索引	71

表

- | | | |
|--|-----------------------------------|----|
| 1. ディスクと電子イメージ・ディレクトリーの名
前の対応 | 2. Developer for System z のフィーチャー | 13 |
| 5 | | |

本書について

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Developer for System z® 9.0.1 のインストールおよびアンインストール方法が記載されています。

本書では、以下のタスクに関する情報が示されています。

- インストールの準備
- IBM Rational Developer for System z のインストール
- 必要なワークステーション・ソフトウェアおよびオプションのワークステーション・ソフトウェアのインストール
- System z コンポーネントのインストール
- インストールにおける既知の問題および制限事項の理解

本書では、以下の名前が使用されます。

- *IBM Rational Developer for System z* は、*Developer for System z* と呼ばれます。
- *IBM Rational Developer for System z Common Access Repository Manager* は、*Common Access Repository Manager* と呼ばれ、*CARMA* と省略されます。

注: 本書に記載されている構成情報は、IBM Rational Developer for System z バージョン 9.0.1 のものです。

本書の対象読者

本書は、ワークステーションで Developer for System z 9.0.1 クライアントをインストールおよび構成するプログラマーを対象としています。本書を使用するには、Microsoft Windows オペレーティング・システム、Red Hat Linux オペレーティング・システム、SUSE Linux オペレーティング・システム、または Ubuntu オペレーティング・システムに精通している必要があります。

Developer for System z についての詳細情報の入手先

本書には、Developer for System z の使用についての情報は含まれていません。その情報については、オンライン・ヘルプを参照してください。

製品の問題および制限事項の詳細については、*IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスクの Documents\en\readme ディレクトリーにある rdz901_releasenotes.html ファイルを参照してください。

更新された資料およびトラブルシューティング情報については、Developer for System z Web サイトの『Library』ページ (http://www-01.ibm.com/software/sw-library/en_US/products/Z964267S85716U24/?S_CMP=rnav) を参照してください。

IBM Rational Developer for System z インストール・ガイド

第 1 章 Developer for System z の概要

Developer for System z には、リモート・システム・コンポーネントとワークステーション・クライアント・コンポーネントがあります。リモート・システム・コンポーネントは一般にその設置場所のシステム・プログラマーによってインストールされ、アプリケーション・プログラマーに対して透過的です。本書ではこれ以降、リモート・コンポーネントが特に呼び出されない限り、Developer for System z という用語は、ワークステーション・コンポーネント (Eclipse プラットフォームで稼働するグラフィカル・ユーザー・インターフェース) のことを指します。

Developer for System z は、Eclipse プラットフォーム (www.eclipse.org) で作成されている一揃いの開発ツールです。Eclipse プラットフォームはフレームワークとお考えください。また、Developer for System z および他のバンドル・オファリングはツール・コントリビューターとお考えください。

プリインストール作業

このタスクについて

製品をインストールする前に、以下に示す手順を実行してください。

1. ご使用のシステムが、5 ページの『第 2 章 クライアント・インストール要件』セクションで説明されている要件を満たしていることを確認します。
2. ユーザー ID が製品をインストールするために必要なアクセス権を満たしていることを確認します。10 ページの『ユーザー特権の要件』を参照してください。
3. 11 ページの『第 3 章 インストールの計画』を読みます。
4. Rational License Key Server をバージョン 8.1.2 以上にアップグレードします。

注: Rational Developer for System z でフローティング・ライセンス (トークン・ライセンスを含む) を使用する場合、製品をインストールする前にライセンス・キー・サーバーを Rational License Key Server バージョン 8.1.2 以上にアップグレードする必要があります。Rational License Key Server バージョン 8.1.2 以上は、製品の以前のバージョンでも使用できます。Rational License Key Server のバージョン 7.1 以前をバージョン 8.1.2 以上にアップグレードする方法については、『Migrating to Rational Common Licensing』 (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html) を参照してください。

5. インストールまたはアンインストールを実行する前に、アンチウイルス/マルウェア検出ソフトウェアを無効にします。

注: 一部のアンチウイルス/マルウェア検出ソフトウェアは、特定のファイル (特に .d11 ファイル) をロックすることがあります。このロックは、インストールとアンインストールの操作に支障をきたします。これらのプログラムによって .d11 ファイルや他のファイルがロックされると、ファイルを削除できないという趣旨のエラーが生成され、インストールとアンインストールの操作が失敗します。

第 2 章 クライアント・インストール要件

このタスクについて

インストールの準備をするために、これらの要件を確認してください。

- メディア要件
- ハードウェア要件およびソフトウェア要件

メディア要件

以降に記載されている物理ディスクの名前は、以下の表に示すように、対応する電子イメージ・ディレクトリーの名前で置き換えることができます。

表 1. ディスクと電子イメージ・ディレクトリーの名前の対応

ディスク名	電子イメージ・ディレクトリー名
IBM Rational Developer for System z インストール・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz901_Setup• RDz901¥disk1• RDz901_RTCz\disk1• RTC403¥disk1• RTC405¥disk1
IBM Rational Developer for System z z/OS® and Multiplatforms Server インストール・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz901_zOS_SMPE• RDz901_RSE
IBM Rational Developer for System z クイック・スタートおよびドキュメンテーション・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz901_QSandDocumentation

ワークステーションに Developer for System z をインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスできる必要があります。

- Developer for System z インストール・ディスク:
 - Developer for System z インストール・ディスク
- Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage® からダウンロードして展開すると、以下の Developer for System z インストール用ディレクトリーがワークステーションに作成されます。

- RDz901_Setup
- RDz901¥disk1

必要な System z コンポーネントを System z リモート・システムへインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスできる必要があります。

- Developer for System z インストール・ディスク:
 - Developer for System z Server for z/OS Server インストール・ディスク

- Developer for System z 電子イメージ:

Developer for System z イメージを Passport Advantage からダウンロードして展開すると、以下のディレクトリーが、必要なソフトウェアを System z リモート・システムにインストールするために使用されます。

- RDz901_zOS_SMPE
- RDz901_RSE

ホスト・コードのインストールの手順については、関連する製品のディレクトリーにある以下のインストール構成資料を参照してください。

- RDz901_zOS_SMPE (z/OS システム)

追加オフリングのメディア

Developer for System z のメディアに加えて、Developer for System z にバンドルされている他のオフリング用に追加のインストール・メディアがある場合があります。

Rational Team Concert™ Integration 拡張機能をインストールするには、以下のメディアにアクセスする必要があります。

- IBM Rational Developer for System z インストール・ディスク
 - *Rational Developer for System z* インストール・ディスク
- IBM Rational Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z 電子イメージをダウンロードすると、拡張機能のインストールに次のディレクトリーが適用されます。

- RDz901_RTCz\disk1

このソフトウェアのインストールについて詳しくは、62 ページの『Rational Team Concert Integration for System z 拡張機能のインストール』を参照してください。

ハードウェア要件およびソフトウェア要件

以下の Developer for System z に関するハードウェア要件とソフトウェア要件は、「*IBM Rational Developer for System z の前提条件*」にも記載されています。前提条件の資料には、ハードウェア要件とソフトウェア要件に関する最新の情報が含まれています。前提条件の資料へのリンクは、以下の Developer for System z Web サイトの「Library」ページにあります。

http://www-01.ibm.com/software/sw-library/en_US/products/Z964267S85716U24/?S_CMP=rnav

Developer for System z のクライアント前提条件

Developer for System z は、大規模ビジネス・アプリケーションを作成するユーザーをサポートするためのライセンス・プログラムです。

このソフトウェアを使用するには、前提条件と相互必要条件があります。

ハードウェア要件

製品をインストールするためのハード・ディスクの最小スペース所要量に対応していることを確認します。 インストール・プロセスの段階ごとのスペース所要量を次の表に示します。

ハードウェア	要件
プロセッサ	<ul style="list-style-type: none">最小: 32 ビット (x86) Core2 Duo (または同等)推奨: 64 ビット (x64) Core2 Quad (または同等)
メモリー	<ul style="list-style-type: none">最小: 3 GB RAM推奨: 4 GB RAM
ディスク・スペース	<ul style="list-style-type: none">最小: 1.5 GB推奨: 2 GB - 5 GB。Rational Developer for System z の構成およびインストールされた他のバンドル・ソフトウェアによる。 <p>注: ソリッド・ステート・ドライブ (SSD) であれば、パフォーマンスがさらに改善される可能性があります。</p>
ディスプレイ	1024 x 768 の解像度 推奨: 1280 x 1024

ワークステーションの前提条件

製品をインストールする前に、システムがソフトウェア要件を満たしているかを確認してください。

オペレーティング・システム: 以下のオペレーティング・システムがこの製品でサポートされています。

製品名	32 ビット	64 ビット	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Windows XP Professional	サポートあり	サポートなし	Service Pack 3 以降
Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise Edition	サポートなし	サポートあり	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard Edition	サポートなし	サポートあり	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows Server 2012 Datacenter Edition	サポートなし	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
Microsoft Windows Server 2012 Essentials Edition	サポートなし	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
Microsoft Windows Server 2012 Standard Edition	サポートなし	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨

製品名	32 ビット	64 ビット	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Windows 7 Professional Edition	サポートあり	サポートあり	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows 7 Enterprise Edition	サポートあり	サポートあり	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows 7 Ultimate Edition	サポートあり	サポートあり	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows 8 Professional Edition	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
Microsoft Windows 8 Enterprise Edition	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
Red Hat Linux Desktop v 6.0	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
Red Hat Linux Enterprise Server v 6.0	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
SUSE Linux Enterprise Server v 11.0	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
SUSE Linux Enterprise Desktop v 11.0	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨
Ubuntu v 12.04 LTS	サポートあり	サポートあり	有効なすべてのサービスを推奨

注:

- Developer for System z 言語サポートは、上記のオペレーティング・システムが基本的な言語をサポートしていることに依存します。
- Red Hat 6.0、64 ビット版に 32 ビット・モードで Developer for System z をインストールするには、以下のパッケージ (32 ビット・ライブラリー) が必要です。
 - libgtk-x11-2.0.so.0
 - libpk-gtk-module.so
 - libcanberra-gtk-module.so
 - xulrunner.i686

開発用ホスト環境/仮想化サポート:

製品名	バージョン	必要な PTF またはサービス・レベル
Citrix®	XenApp 6.0	使用可能なすべてのメンテナンス
VMware®	vSphere 4.1 ESXi および vSphere 5 ESXi	使用可能なすべてのメンテナンス

仮想化環境で使用する IBM SWG 製品のソフトウェア・サポート・サービスの詳細については、「VMware 環境における IBM SWG 製品に対するソフトウェア・サポート (Software support for IBM SWG products in a VMware environment)」を参照してください。

ワークステーションの相互必要条件

インストールすることを選択した Developer for System z の機能によっては、インストールの相互必要条件として、このセクションにリストしているソフトウェアをインストールすることが Developer for System z には必要です。

注: サポートされるデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア製品については、オンライン・ヘルプを参照してください。

TXSeries for Multiplatforms:

注: Developer for System z Linux クライアントでは、TXSeries はサポートされません。

組み込み CICS® ステートメントを使用するアプリケーションをサポートするには、以下のいずれか 1 つのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5724-B44	TXSeries for Multiplatforms v 7.1	使用可能なすべてのメンテナンス
5655-M15	TXSeries for Multiplatforms v 6.2	使用可能なすべてのメンテナンス

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www.ibm.com/software/http/cics/txseries/>

DB2 Connect:

組み込み SQL ステートメントを使用するアプリケーションをサポートするには、以下のいずれか 1 つのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5724-B56	DB2® Connect Personal Edition v 10.1	
5724-B55	DB2 Connect™ Personal Edition v 9.7	

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www-01.ibm.com/software/data/db2/linux-unix-windows/>

Web ブラウザー:

README ファイルとインストール・ガイドを表示するには、以下の Web ブラウザーのいずれかがインストールされている必要があります。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Internet Explorer 8.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス
Firefox 10.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス

Adobe Acrobat Reader:

製品資料 PDF を正しく表示するには、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Adobe Acrobat Reader Version 7.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス

ユーザー特権の要件

IBM Rational Developer for System z をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID に 2 バイト文字が含まれていない。
- システムのすべてのユーザーに対しインストールする場合は、管理者グループに属する ID が必要です。管理者特権がない場合、現行ユーザーに対してしかインストールできません。

第 3 章 インストールの計画

製品フィーチャーをインストールする前に、ここに記載されたすべてのトピックをお読みください。インストールを実際に開始する前にインストール・プロセスの主な段階を適切に計画および理解することによって、多くの問題を回避することができます。

インストール方式

Developer for System z は、いくつかの方式でインストールできます。

使用するインストール方式を決定する要因のいくつかは以下のとおりです。

- インストール・ファイルにアクセスするために使用するフォーマットと方法 (例えば、インストール・ディスクまたは IBM Passport Advantage からダウンロードされたファイル)。
- ご使用のワークステーションにインストールするか、またはインストール・ファイルを企業内で使用可能にするかどうか。
- Installation Manager の GUI を使用してインストールするか、またはサイレント・インストールを実行するかどうか。

以下は、使用できる標準的なインストールの方式です。

- インストール・ディスクからのインストール
- ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール
- HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

注: 後者の 3 つの方式では、Developer for System z をインストールするために、サイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行できます。サイレント・モードでの Installation Manager の実行について詳しくは、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

インストール・ディスクからのインストール

この方式では、インストール・ファイルが含まれているインストール・ディスクを使用して、一般に、各自のワークステーションに Developer for System z をインストールします。手順の概要については、25 ページの『概要: インストール・ディスクからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

電子イメージの使用

電子イメージの解凍

IBM Passport Advantage からインストール・ファイルをダウンロードした場合は、インストールを開始する前に、Developer for System z およびインストールを希望す

るバンドル・オフリングの圧縮ファイルから電子イメージを解凍する必要があります。Developer for System z 電子イメージは、.zip ファイルとして圧縮されています。

ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール

この方式では、IBM Passport Advantage からダウンロードしたインストール・ファイルを使用して、ワークステーションに Developer for System z をインストールします。手順の概要については、26 ページの『概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

この方式では、企業内のユーザーが単一ロケーションから Developer for System z のインストール・ファイルにアクセスできるように、共用ドライブに電子イメージを置きます。手順の概要については、27 ページの『概要: 共有ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

この方式は、ネットワーク全体にインストールするための代替方法です。この方式は共有ドライブで電子イメージを使用するのとは異なります。なぜなら、Developer for System z のインストール・ファイルを HTTP Web サーバーに配置するために、Rational Enterprise Deployment ディスクの Developer for System z インストール・メディアと共に提供されている IBM Packaging Utility というユーティリティ・アプリケーションを使用しなければならないからです。IBM Packaging Utility は、HTTP Web サーバーから直接 Developer for System z をインストールできるように、そのインストール・ファイルをパッケージ・フォーマットでコピーするために使用します。このパッケージが入った HTTP Web サーバー上のディレクトリーは、リポジトリと呼ばれます。同じリポジトリをその他のオフリングおよび将来のサービス更新に使用することができます。手順の概要については、28 ページの『概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール』 および 29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

フィーチャーのインストール

インストールする機能およびバンドル・オフリングごとに Developer for System z インストールをカスタマイズできます。Developer for System z ランチパッドでは、ガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールを選択することができます。

Developer for System z ランチパッド・プログラムについて詳しくは、29 ページの『ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。

Installation Manager は、フィーチャー間の依存関係を自動的に強制し、すべての必須フィーチャーが選択されるようにします。

注: パッケージのインストールが終了した後も、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行することにより、インストール済み環境にフィーチャーの追加や除去ができます。詳しくは、53 ページの『第 8 章 インストール済みパッケージの変更』を参照してください。

Developer for System z のフィーチャー

次の表は、インストール可能な Developer for System z のフィーチャーを示しています。Developer for System z にバンドルされている他のオファリングの使用可能なフィーチャーについては、それらのオファリングの資料を参照してください。

表 2. Developer for System z のフィーチャー

フィーチャー	説明
System z 統合開発環境 (必須)	対話式のワークステーション・ベース環境を提供します。この環境では、メインフレームに接続でき、COBOL、PL/I、アセンブラー、C/C++、および Java™ で記述されたメインフレーム・ベースのアプリケーションを開発できます。
コード・レビュー	コードが規則やベスト・プラクティスに準拠しているかを検査します。問題の起こりそうな箇所を強調表示し、品質向上のためのコード変更を推奨します。
行レベル・コード・カバレッジ	アプリケーションのテスト範囲を測定し、そのレポートを作成するためのツールを提供します。レポートは、テスト済みのソース・コード行と、テストが必要なソース・コード行を示します。
System z コード生成プログラム	UML モデルまたはユーザー提供の入力から、System z のアプリケーション・コード・スケルトンおよびロジックを迅速に作成できる設計ツールおよびウィザードを提供します。
IBM z/OS Automated Unit Testing Framework (zUnit)	Enterprise COBOL および PL/I の、コード主導型の単体テスト・フレームワークを提供します。IBM z/OS Automated Unit Testing Framework (zUnit) は、zUnit フレームワークを使用して作成された Enterprise COBOL および PL/I 単体テスト・ケースの実行および検証を行う、自動化ソリューションを提供します。
SCLM Developer Toolkit	Software Configuration and Library Manager (SCLM) が管理するソース・コードにアクセスして操作するためのツールを提供します。
Rational ClearCase® SCM Adapter	IBM Rational ClearCase SCM プラグインおよび ClearCase MVFS プラグインを提供します。これらのプラグインにより、ClearCase VOB およびビュー・サーバーもインストールされている場合に、スナップショット・ビューおよび動的ビューを使用して、ClearCase のバージョン付きオブジェクト・ベース (VOB) 中のソフトウェア成果物のバージョン管理を行うことが可能になります。

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明
CA Endeavor Software Change Manager	CA Endeavor Software Change Manager が管理するソース・コードにアクセスして操作するためのツールを提供します。
Enterprise Service Tools for CICS (サービス・コンポーネント・アーキテクチャーを含む)	Enterprise Service Tools for CICS は、最新のアプリケーション・アーキテクチャーならびに既存の CICS アプリケーション・プロセスの変換および再利用をサポートする、統合されたツール・セットを提供します。これらのツールは、Web サービス記述の生成、および CICS TS や CICS Service Flow Runtime を含み、直接 z/OS システムに対して成果物を処理するサービス・フローをサポートします。Enterprise Service Tools により、サービス指向アーキテクチャー (SOA) への移動が可能になります。
BMS Screen Designer	基本マッピング・サポート (BMS) マップ・セットを視覚的に作成および変更することができます。CICS 開発者で、端末ベースのツール (例えば SDF II) に習熟した開発者や、GUI ベースのツール (VA COBOL に組み込まれた BMS エディターなど) に習熟した開発者が使用できるようにデザインされています。
CICS コード生成プログラム	UML モデルまたはユーザー提供の入力から、CICS Transaction Server のアプリケーション・コード・スケルトンおよびロジックを作成できる設計ツールおよびウィザードを提供します。例えば、UML モデルまたはデータベース・スキーマ定義を使用して、DB2 テーブルに作成、読み取り、更新、および削除のインターフェースを提供する CICS トランザクションを生成します。
Enterprise Service Tools for IMS™	最新のアプリケーション・アーキテクチャーならびに既存の IMS アプリケーション・プロセスの変換および再利用をサポートする、統合されたツール・セットを提供します。これらのツールは、Web サービス記述の生成、および z/OS システム (IMS SOAP ゲートウェイや IMS 2.0 情報製品アプリケーションを含む) に対して成果物を直接処理することをサポートします。Enterprise Service Tools により、サービス指向アーキテクチャー (SOA) への移動が可能になります。
MFS Screen Designer	メッセージ形式サービス (MFS) メッセージの作成および変更と、ファイルのフォーマット設定を行うことができます。多くの情報管理システム (IMS) プログラムは、端末装置との間で送受信するメッセージをフォーマット設定する IMS Transaction Manager 環境機能の 1 つである、MFS に基づいています。

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明
IMS コード生成プログラム	共通のプログラミング・オブジェクトを IMS アプリケーション・コードに追加できるコード・スニペットを提供します。
データ・ツール	テーブル、テーブル・ビュー、およびフィルターを操作するためのリレーショナル・データベース・ツールを提供します。これらのツールにより、リバース・エンジニアリング・データベース表または DDL スクリプトを使用して、物理データベース・モデルを作成できます。このツールを使用して、SQL ステートメント、DB2 ルーチン (ストアド・プロシージャおよびユーザー定義関数など)、および SQLJ、SQL DDL、XML ファイルといった何種類ものファイル・タイプを作成することもできます。
System z Stored Procedures	COBOL、PL/I、Java、または SQL で書かれた DB2 ストアド・プロシージャを作成してテストし、それらを z/OS システムに直接デプロイすることができます。
System z デバッガー	IBM Debug Tool でワークステーション・ベースのインターフェースを使用できるようにし、z/OS システムで実行するアプリケーションのリモート・デバッグ・セッションを行えるようにします。注: このフィーチャーには、IBM Debug Tool のライセンスが必要です。
Common Access Repository Manager (CARMA)	System z ベースのソース制御管理ツールにアクセスするための統一されたインターフェースおよび一連のサービスを提供します。CARMA はまた、カスタム・ソース制御管理システムにアクセスおよび結合するためのフレームワークとして使用できる汎用グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) クライアントを提供します。
プラグイン開発環境 (PDE)	IBM Software Delivery Platform Eclipse 環境を拡張するために使用できる Eclipse プラグインを作成、開発、テスト、デバッグ、およびデプロイするためのツールを提供します

第 4 章 IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、Developer for System z および他のパッケージをワークステーションにインストールするプログラムです。また、インストールしたこれらのパッケージや他のパッケージを更新、変更、およびアンインストールします。パッケージとは、Installation Manager を使用してインストールするように設計されている製品、コンポーネント・グループ、または単一のコンポーネントです。

IBM Installation Manager の最新情報については、下記アドレスの Installation Manager インフォメーション・センターを参照してください。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/index.jsp>

Installation Manager は、時間を節約するための数多くのフィーチャーを提供するインストール管理ツールです。コンピューターで製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行うのに役立ちます。インストールしようとしているパッケージ、さらにすでにインストールされているパッケージ、およびインストール可能なパッケージを追跡します。最新バージョンのパッケージをインストールしようとしていることがわかるように、更新を検索します。また、インストールするパッケージのライセンス管理や、パッケージの更新および変更を行うためのツールも備えています。

Developer for System z を多数のユーザーに対してデプロイする方法については、Installation Manager インフォメーション・センターの『Enterprise installation articles』セクションにある情報を参照してください。これは以下の Web ページです。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/topic/com.ibm.im.articles.doc/topics/articles.html>

さらに、developerWorks® の Rational Installation Wiki にある情報も参照してください。以下のサイトです。

<https://www.ibm.com/developerworks/wikis/display/rationalinstall/Home>

以下のように、Installation Manager の 6 つのウィザードを使用して、ライフ・サイクルを通じてパッケージの保守を行います。

- 「インストール」ウィザードは、インストール・プロセスを支援します。デフォルトを受け入れてパッケージをインストールすることも、デフォルト設定を変更してインストールをカスタマイズすることもできます。パッケージをインストールする前に、ウィザードで選択したすべての項目の要約が表示されます。ウィザードを使用すると、1 つ以上のパッケージを一度にインストールすることができます。
- 「更新」ウィザードは、インストール済みパッケージに適用可能な更新を検索します。更新は、リリース済みのフィックス、新規フィーチャー、または製品の新規バージョンである可能性があります。ウィザードには更新内容の詳細が表示されます。更新を適用するかどうかを指定できます。

- 「変更」ウィザードでは、インストール済みのパッケージの特定の要素を変更できます。パッケージを初めてインストールするときに、インストールするフィーチャーを選択します。後で他のフィーチャーが必要になった場合は、「変更」ウィザードを使用してそれらのフィーチャーを追加できます。フィーチャーを削除することも可能です。
- 「ライセンスの管理」ウィザードでは、パッケージのライセンスをセットアップできます。試用版ライセンスをフル・ライセンスに変更したり、フローティング・ライセンス用にサーバーをセットアップしたり、パッケージごとに使用するライセンスのタイプを選択したりするには、このウィザードを使用します。
- 「インポート」ウィザードは、Installation Manager 以外のインストール・ツールを使用してインストールしたパッケージを、インストール済みパッケージのリストに追加します。

Installation Manager は、インストールする製品（選択可能なフィーチャーや製品の保守更新を含む）を追跡管理します。Installation Manager でインストールできる一部の製品の旧バージョンが他のインストール・テクノロジーでインストールされている可能性もあります。Installation Manager は、これらの製品の変更や更新を実行する前に、これらの製品の既存のインストール環境に関する情報をインポートしなければなりません。

注: このウィザードは、Installation Manager が、このフィーチャーを必要とするパッケージをリポジトリ内で検出した後のみ使用できます。

- 「ロールバック」ウィザードでは、パッケージを前のバージョンに戻すことができます。
- 「アンインストール」ウィザードは、コンピューターからパッケージを削除します。複数のパッケージを一度にアンインストールすることができます。

Installation Manager のインストール

このタスクについて

IBM Installation Manager は通常、Developer for System z インストール・プロセスの一部として自動的にインストールされます。

Developer for System z をインストールしないで、IBM Installation Manager 自体をインストールする必要がある場合は、次の場所にインストール・ファイルがあります。

- IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ・ディスクの `InstallerImage_platform` ディレクトリーで、*platform* は、インストール先のプラットフォーム (*win32* や *linux* など) を指しています。
- 電子イメージをダウンロードした場合は、
`RDz901_Setup¥InstallerImage_platform` ディレクトリー

Installation Manager をインストール・メディアから直接インストールすることも、他のユーザーがアクセスできる共有ロケーションに `InstallerImage_platform` ディレクトリーをコピーすることもできます。

1. *platform* ディレクトリーに移動します。

2. システムの全ユーザーのために管理者としてインストールする場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
install.exe
```

Linux

```
install
```

現行ユーザーだけのために非管理者としてインストールする場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
userinst.exe
```

Linux

```
userinst
```

3. 「パッケージのインストール」ウィザードの最初のページにある「他のバージョンと拡張機能の確認」をクリックして、入手可能な最新のバージョンをインストールします。より新しいバージョンが使用できる場合は、それが自動的にインストール対象として選択されます。「次へ」をクリックします。
4. 「ライセンス」ページで、IBM Installation Manager のご使用条件を読みます。ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。
5. 「ロケーション」ページの「**Installation Manager ディレクトリー**」フィールドに、Installation Manager をインストールするディレクトリーのパスを入力するか、デフォルトのパスをそのまま受け入れます。次に、「次へ」をクリックします。
6. インストール・プロセスを開始する前に「要約」ページで選択内容を確認します。選択内容を変更するには、「戻る」をクリックして、前のページに戻ります。選択内容がそのままであれば、「インストール」をクリックします。

また、以下の手順に従って、サイレントに Installation Manager をインストールすることもできます。

1. コマンド・プロンプトまたは端末ウィンドウを開き、`InstallerImage_platform` ディレクトリーに移動します (`platform` は、インストール先のプラットフォームです)。
2. システムの全ユーザーのために管理者としてサイレント・インストールを実行する場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
installc.exe -acceptLicense
```

Linux

```
installc -acceptLicense
```

現行ユーザーだけのために非管理者としてインストールする場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
userinstc.exe -acceptLicense
```

Linux

```
userinstc -acceptLicense
```

注: -acceptLicense コマンド・ライン・オプションを指定することにより、IBM Installation Manager のご使用条件を受け入れることを示します。

Installation Manager の開始

このタスクについて

IBM Installation Manager は、Developer for System z のインストールを開始すると、自動的にインストールされ、開始します。

Installation Manager を手動で開始して、更新、変更、ロールバック、またはアンインストールをインストール後のパッケージに対して行う必要がある場合は、以下の手順を行います。

Windows

1. タスクバーから「スタート」メニューを開きます。
2.
 - 管理者によるインストールの場合、「すべてのプログラム」 > 「IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」をクリックします。
 - 非管理者によるインストールの場合、「すべてのプログラム」 > 「My IBM Installation Manager」 > 「IBM Installation Manager」をクリックします。

Linux

1. 端末ウィンドウを開きます。
2. *Installation Manager install directory*/eclipse ディレクトリーに移動します。
3. 次のコマンドを実行します。./IBMIM

アンインストールと Installation Manager

このタスクについて

注: すべてのパッケージがアンインストールされるまで IBM Installation Manager をアンインストールすることはできません。

Windows

「プログラムの追加と削除」パネルを使用して、IBM Installation Manager をアンインストールする必要があります。

1. タスクバーから「スタート」メニューを開きます。
2. 「コントロール パネル」 -> 「プログラムの追加と削除」 -> 「IBM Installation Manager」を選択します。
3. 「削除」をクリックして、表示中の指示に従います。

Linux

Installation Manager をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

1. 端末ウィンドウを開きます。
2. コマンド `/var/ibm/InstallationManager/uninstall/uninstall` を実行します。

Installation Manager の使用

インストール・リポジトリ

インストール可能なオフラインまたはパッケージは、リポジトリと呼ばれるロケーションに保管されます。これは HTTP Web サーバー、共用ネットワーク・ドライブ、物理ディスク、ご使用のローカル・ワークステーションの上のいずれかになります。Installation Manager は、これらのリポジトリからパッケージを取り出して、それをシステムにインストールします。

Developer for System z のインストールをランチパッド・プログラムから起動すると、必要なリポジトリ情報が Installation Manager へ自動的に渡されます。Windows の「スタート」メニューから手動で Installation Manager を開始するときは必ず、インストールするパッケージが入ったリポジトリを指定します。Installation Manager のリポジトリ設定に、リポジトリの詳細を入力して、Installation Manager にその検索場所を知らせる必要があります。詳しくは、22 ページの『Installation Manager でのリポジトリ設定』を参照してください。

組織によっては、独自の製品パッケージをイントラネット内でバンドルおよびホストする場合があります。このタイプのビジネス・ケース・シナリオについては、12 ページの『HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を取得することが必要になります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、インストールするそれぞれのパッケージに組み込まれた URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、サービス更新や新規フィーチャーといったインストール可能なパッケージを検索します。

Installation Manager でのリポジトリ設定

このタスクについて

Developer for System z のインストールをランチパッド・プログラムから開始すると、必要なリポジトリ情報が Installation Manager へ自動的に渡されます。ただし、例えば Web サーバーにあるリポジトリからパッケージをインストールするなどのために、Windows の「スタート」メニューから手動で Installation Manager を開始する場合は、パッケージをインストールする前に、Installation Manager の設定にリポジトリ・ロケーションを追加する必要があります。追加するリポジトリ・ロケーションは、Installation Manager の「設定」ウィンドウの「リポジトリ」パネルで行います。デフォルトでは、Installation Manager は、それぞれの Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれた URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージ、更新、および新規フィーチャーを検索します。お客様の組織で、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトするよう要求される場合があります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリ URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下の手順を行います。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「開始」ページで、「ファイル」->「設定」をクリックしてから、「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、URL を参照してファイル・パスを入力してから、「OK」をクリックします。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不能である場合は、「アクセス可能」列に赤い x が表示されます。
5. 「OK」をクリックして終了します。

パッケージ・グループと共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して Developer for System z をインストールする場合は、パッケージ・グループおよび共有リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Developer for System z およびインストールする他のバンドル・オフリングのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。これはシェル共用として知られています。

Installation Manager を使用して、Developer for System z およびバンドル・オフリングをインストールする場合は、新しいパッケージ・グループを作成すること

も、パッケージを既存のパッケージ・グループにインストールすることもできます。(パッケージによっては、パッケージ・グループを共用できないことがあります。この場合、既存のパッケージ・グループを使用するためのオプションが使用不可になります。)

注: ほとんどの環境では、複数のパッケージを同時にインストールすると、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

パッケージ・グループには、自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーはユーザーが選択します。

パッケージを正常にインストールして、パッケージ・グループを作成した後は、そのパッケージ・グループのインストール・ディレクトリーを変更できません。インストール・ディレクトリーには、そのパッケージ・グループにインストールしたパッケージに固有のファイルとリソースが入っています。他のパッケージ・グループが共用する可能性のあるパッケージ内の他のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに入れられます。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリーは、異なるパッケージ・グループに入っている可能性の高い、異なるパッケージによる共用が可能なリソースを保管しているディレクトリーです。これらのリソースに共通のロケーションを使用すると、**Installation Manager** は、複数のパッケージによって使用される同じリソースの個別コピーをインストールするのではなく、各リソースの 1 つのコピーのみをインストールしてディスク・スペースを節約できます。

重要: 共用リソース・ディレクトリーを指定できるのは、パッケージの初回インストール時の 1 回のみです。最良の結果を得るためには、最も容量の大きいドライブをこのディレクトリーに使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、後でディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

既存 Eclipse IDE の拡張

Developer for System z パッケージには、Eclipse 統合開発環境 (IDE) のバージョンつまりワークベンチが含まれます。これは Developer for System z のインストール時にインストールされます。ただし、すでにインストールされている既存の Eclipse 統合 IDE がワークステーションにある場合は、既存の環境に Developer for System z 機能を追加することによって、その IDE を拡張できます。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、Developer for System z のインストール中に、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで「**既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing Eclipse IDE)**」オプションを選択して、既存の Eclipse IDE を拡張します。既存の Eclipse IDE と使用する Java Virtual Machine (JVM) 仮想マシン (JVM) のロケーションが求められます。

例えば、Developer for System z パッケージで提供される機能を取得したいが、Developer for System z の機能を操作する際には現行 IDE の設定を使用したい場合などに、既存の Eclipse IDE を拡張することができます。また、すでにインストール済みのプラグインを操作して、Eclipse IDE を拡張することもできます。

拡張するには、既存の Eclipse IDE はバージョン 4.2.2 でなければなりません。また、IBM Java Development Kit (JDK) は少なくともバージョン 1.6 を使用する必要があります。Installation Manager は、指定された Eclipse 環境がインストール・パッケージの要件を満たすかどうかを検査します。要件を満たしていない場合には、その Eclipse IDE を拡張できません。

第 5 章 Developer for System z のインストール

インストール作業の要約

ここでは、Developer for System z のインストール時に使用する各種のインストール方式の概要を示します。

概要: インストール・ディスクからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが含まれている物理ディスクを使用して、一般に、各自のワークステーションに Developer for System z をインストールします。

インストール・ディスクからインストールする場合の一般的な手順は、以下のとおりです。

1. 3 ページの『プリインストール作業』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. *Rational Developer for System z* インストール・ディスク を DVD ドライブに挿入します。
3. システムで自動実行が有効になっている場合は、Developer for System z のランチパッド・プログラムが自動的にオープンします。自動実行が有効になっていない場合は、ディスクのルートから次のコマンドを実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。

Windows : launchpad.exe

Linux : launchpad.sh

詳しくは、29 ページの『ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。

4. 「**Rational Developer for System z のインストール**」をクリックします。
5. Developer for System z のエキスパート・インストールかガイド付きインストールのどちらを実行するか決定します。ガイド付きインストールでは、インストールするフィーチャーの決定に役立てるため、インストール・ウィザードを使用します。エキスパート・インストールは、最も一般的なフィーチャーが選択された状態で開始され、インストールするフィーチャーを尋ねられます。詳しくは、29 ページの『ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。
6. Developer for System z および任意のバンドル・オファリングをインストールするには、IBM Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従います。詳しくは、31 ページの『Installation Manager を使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。

7. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オフティングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている状態で期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合や、フローティング・ライセンスを構成することを望んでいる場合は、ここでその作業を行います。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。
8. Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、61 ページの『第 12 章 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

電子インストール・イメージからインストールする場合の一般的な手順は、以下のとおりです。

1. IBM Passport Advantage からダウンロードする必要があるファイルと、解凍したインストール・イメージの両方を保管するための十分なスペースがワークステーションにあることを確認します。7 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. インストールする Developer for System z およびバンドル・オフティングの必要なパーツをすべて IBM Passport Advantage から一時ディレクトリーにダウンロードします。
3. ダウンロードした圧縮ファイルからインストール・イメージを解凍して、インストール・イメージが完全であることを検証します。詳しくは、11 ページの『電子イメージの解凍』を参照してください。
4. 『電子イメージからのインストール』の手順に進みます。

電子イメージからのインストール

このタスクについて

以下の手順を実行します。

1. 3 ページの『プリインストール作業』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. RDz901_Setup ディレクトリーのルートから次のコマンドを実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。

Windows

```
1 launchpad.exe
```

Linux

```
1 launchpad.sh
```

詳しくは、25 ページの『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。

注: ご使用のオペレーティング・システムが Windows 7 または Windows 8 で、すべてのユーザー用に製品をインストールしている場合には、`launchpad.exe` を管理者として実行しなければなりません。

3. 「**Rational Developer for System z のインストール**」をクリックします。
4. Developer for System z のエキスパート・インストールかガイド付きインストールのどちらを実行するか決定します。ガイド付きインストールでは、インストールするフィーチャーの決定に役立てるため、インストール・ウィザードを使用します。エキスパート・インストールは、最も一般的なフィーチャーが選択された状態で開始され、インストールするフィーチャーを尋ねられます。詳しくは、25 ページの『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。
5. Developer for System z および任意のバンドル・オフアリングをインストールするには、IBM Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従います。詳しくは、31 ページの『Installation Manager を使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。
6. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オフアリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている状態で期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合や、フローティング・ライセンスを構成することを望んでいる場合は、ここでその作業を行います。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。
7. Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、61 ページの『第 12 章 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: 共有ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

このシナリオでは、企業内のユーザーが単一ロケーションから Developer for System z およびバンドル・オフアリングのインストール・ファイルにアクセスできるように、共有ドライブに電子イメージを置きます。共有ドライブからインストールすることは、数多くのユーザー・システムでサイレント・インストールを実行する必要がある場合にも役立ちます。共有ドライブにインストール・イメージを置くには、以下の手順を行います。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、共有ドライブにあることを確認してください。詳しくは、7 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. Developer for System z およびバンドル・オフアリングの必要なパーツをすべて IBM Passport Advantage から共有ドライブ上の一時ディレクトリーにダウンロードします。

注: また、パーツをワークステーションにダウンロードして、解凍したインストール・イメージのみを共有ドライブにコピーすることもできます。

3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリに解凍して、インストール・イメージが完全であることを検証します。詳しくは、11 ページの『電子イメージの解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Developer for System z を対話式にインストールするには、以下の手順を行います。

1. インストール・イメージのある共用ドライブ上の RDz901_Setup ディレクトリに移動します。
2. 26 ページの『電子イメージからのインストール』の手順に従って、Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールします。

共有の電子イメージを使用したサイレント・インストールについては、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

このシナリオでは、IBM Installation Manager が HTTP Web サーバーから製品パッケージを取得します。

以下の手順では、Developer for System z およびバンドル・オファリングのパッケージが入ったりポジトリが HTTP Web サーバー上に作成されているものとします。HTTP Web サーバーへのインストール・パッケージのコピーについて詳しくは、see 29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリから Developer for System z パッケージをインストールするには、以下の手順を行います。

1. 3 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。18 ページの『Installation Manager のインストール』を参照してください。
3. Installation Manager を開始します。詳しくは、20 ページの『Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Installation Manager で、Developer for System z パッケージが入ったりポジトリの URL をリポジトリ設定に追加します。22 ページの『Installation Manager でのリポジトリ設定』を参照してください。
5. 「インストール」をクリックして Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、画面上の指示に従って、インストールを完了します。
6. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オファリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている状態で期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合や、フローティング・ライセンスを構成することを望んでいる場合は、ここでその作業を行います。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。

7. IBM Rational Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、61 ページの『第 12 章 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置

IBM Packaging Utility を使用してインストール・リポジトリを作成することにより、Developer for System z インストール・パッケージと他のオフファリング・パッケージを HTTP Web サーバーに配置することができます。この方法は、Developer for System z 9.0.1 オフファリングおよびそのバンドル・オフファリングに加えて、さまざまな数多くのオフファリングやサービス更新を単一のリポジトリに置く必要がある場合に行うと便利です。このリポジトリを使用して、対話式インストールまたはサイレント・インストールを実行できます。

注: HTTP Web サーバー上のリポジトリからサイレント・インストールを実行できますが、そのようなサーバーはサイレント・インストールに必須ではありません。

パッケージを HTTP Web サーバーに配置するには、IBM Packaging Utility を使用して、新規インストール・リポジトリを作成するか、既存のリポジトリへコピーします。IBM Packaging Utility をインストールして使用するための詳細な手順については、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/index.jsp>) を参照してください。『Packaging Utility でのパッケージの管理』というトピック (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/topic/com.ibm.cic.auth.ui.doc/topics/c_modes_pu.html) に最新情報があります。

リポジトリを作成した後、以下の手順に従います。

1. 企業内のユーザーに、インストール・リポジトリの URL を提供します。ユーザーは、自分のシステムにインストール・メディアがなくても、リポジトリを指してインストールできます。
2. リポジトリを使用して、サイレント・インストールを実行します。サイレント・インストールの実行について詳しくは、「35 ページの『サイレント・インストール』」を参照してください。

ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール

Developer for System z ランチパッド・プログラムでは、リリース情報の表示とインストール・プロセスの開始を単一のロケーションで行うことができます。

以下のケースでは、ランチパッド・プログラムを使用して、Developer for System z のインストールを開始します。

- 製品インストール・ディスクからインストールする。
- ワークステーション上の電子イメージからインストールする。
- 共用ドライブ上の電子イメージからインストールする。

インストールをランチパッド・プログラムから開始すると、必要なリポジトリ・ロケーション情報が自動的に構成された状態で、IBM Installation Manager が起動し

ます。この自動構成により、Installation Manager の設定で、リポジトリ・ロケーションを手動で設定する必要はありません。

ランチパッドの「*Rational Developer for System z* のインストール」パネルでは、すべてのユーザー用にインストールするか (この場合は管理者権限を持っている必要があります)、現在のユーザー用のみにインストールするかを決定できます。次に、提供されたリンクのいずれかをクリックして、ガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールを開始します。

ガイド付きインストールを選択する代わりに、エキスパート・インストールの実行を選択できます。エキスパート・インストールを選択すると、最も一般的なフィーチャーおよびバンドル・オファリングがデフォルトで選択された状態で、Developer for System z のインストールが起動します。

注: ランチパッド・プログラムからいずれのインストール・オプションを選択した場合も、Installation Manager の「フィーチャー」パネルで追加フィーチャーの選択および選択解除を行うことにより、インストールするフィーチャー・セットをいつでもカスタマイズできます。

ランチパッド・プログラムから Developer for System z のインストールを管理者として開始するには、以下の手順を行います。

1. プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、3 ページの『プリインストール作業』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。
2. インストール・ディスクからインストールする場合は、IBM Rational Developer for System z のインストール・セットアップ・ディスクを、ご使用の DVD ドライブに挿入します。電子イメージからインストールする場合は、RDz901_Setup ディレクトリーを開きます。
3. システムで自動実行が有効になっている場合は、IBM Rational Developer for System z のインストール・セットアップ・ディスクを DVD ドライブに挿入すると、ランチパッド・プログラムが自動的に開始されます。システムで自動実行が有効になっていない場合や、電子イメージからインストールする場合は、ディスクのルートまたは RDz901_Setup ディレクトリーから以下のコマンドを実行してランチパッド・プログラムを開始します。
 - **Windows** : launchpad.exe
 - **Linux** : launchpad.sh
4. 「ようこそ」パネルの情報を読み、選択可能な資料のリストを表示するには、左方にある「製品資料」を選択して、リンクをクリックします。
5. IBM Rational Developer for System z をインストールするには、左方にある「**IBM Rational Developer for System z のインストール**」をクリックします。すべてのユーザー用にインストールする場合は、「**すべてのユーザー用インストール**」ラジオ・ボタンをクリックします。現在のユーザー用にのみインストールする場合は、「**現在のユーザー用インストール**」ラジオ・ボタンをクリックします。
6. 使用するインストールの種類を指定します。
 - a. IBM Rational Developer for System z のガイド付きインストールを開始するには、「**ガイド付きインストールの開始**」をクリックします。Developer for System z インストール・ウィザードで、対応するボックスを選択することに

より、インストールするフィーチャーを選択します。次に、ガイド付き (またはカスタム) インストールを続行するには、パネルの下部でリンクをクリックします。

- b. IBM Rational Developer for System z のエキスパート・インストールを開始するには、「**エキスパート・インストールの開始**」をクリックします。
7. IBM Installation Manager が起動し、Developer for System z および指定したバンドル・オファリングをインストールされます。「パッケージのインストール」ウィザードのプロンプトに従って、インストールを完了します。詳しくは、『Installation Manager を使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。

注: ランチパッド・パネルには「**オプション・ソフトウェアのインストール**」オプションもあります。そのボックスを選択し、以下のようなオプション・ソフトウェアをインストールします。

- TXSeries for Multiplatforms v7.1
- DB2 Connect
- Data Studio

Installation Manager を使用した Developer for System z のインストール

このタスクについて

ランチパッド・プログラム (29 ページの『ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール』を参照) から Developer for System z のインストールを起動すると、IBM Installation Manager が開始して、「パッケージのインストール」ウィザードが示されます。以下の手順は、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードを使用して Developer for System z をインストールするプロセスです。

手順

1. ウィザードの最初のパネルに、インストールに選択可能なパッケージのリストが表示されます。選択可能なパッケージには、Developer for System z および、ランチパッドでの選択に基づいて推奨されるバンドル・オファリングが含まれます。ランチパッド・プログラムについて詳しくは、29 ページの『ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール』を参照してください。選択可能なバンドル・オファリングは、購入した Developer for System z の版によって異なります。
2. IBM Installation Manager を新しいバージョンに更新するプロンプトが出された場合、すぐにアップデートし、「はい」をクリックするか、後で新しいバージョンにインストールするか、「いいえ」をクリックします。「はい」をクリックした場合、Installation Manager は自らを更新して、再始動するようプロンプトを出します。「OK」をクリックして、Installation Manager を再始動します。

注:

- Rational Developer for System z は、Rational Team Concert クライアントの 2 つのバージョンおよび Rational Team Concert Integration for System z と

同梱で出荷されます。バージョン 4.0.3 およびバージョン 4.0.5 両方のインストール・オプションを表示するには、「パッケージのインストール」パネルにある「すべてのバージョンを表示」チェック・ボックスを選択します。

- Rational Team Concert バージョン 4.0.5 クライアントを使用して接続するには、Rational Team Concert Server のバージョン 4.0.5 (またはそれ以降) がインストールされていなければなりません。
3. 「ライセンス」パネルで、選択したパッケージのご使用条件をお読みください。インストールする各パッケージには、ご使用条件があります。各パッケージ名をクリックして、対応するご使用条件を表示します。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「同意する (I accept the terms of the license agreements)」をクリックします。
 - b. 続行するには、「次へ」 をクリックします。
 4. 「ロケーション」パネルで、システムに他のパッケージがインストールされていない場合は、共用リソース・ディレクトリーとして使用するロケーションを指定する必要があります。「共有リソース・ディレクトリー (Shared Resources Directory)」フィールドに、使用する共用リソース・ディレクトリーのパスを入力してください。Developer for System z と一緒に Installation Manager もインストールする場合は、「Installation Manager ディレクトリー」フィールドに、Installation Manager をインストールする場所を入力します。共用リソース・ディレクトリーとして、最大のドライブにあるロケーションを選択するようにしてください。共用リソース・ディレクトリーは、Installation Manager を使用してインストールするすべてのパッケージで使用されます。しかも、最初のパッケージをインストールした後の変更はできません。すでに 1 つ以上のパッケージをシステムにインストール済みの場合は、Installation Manager から、共用リソース・ディレクトリーのロケーションが表示されますが、ロケーションを選択または変更できません。

注: 共用リソース・ディレクトリーのロケーションを後で変更するには、すべてのパッケージをアンインストールしてから、新しい共用リソース・ディレクトリーを指定してパッケージを再インストールする必要があります。

選択が終了したら、「次へ」をクリックします。

5. 次の「ロケーション」パネルで、Developer for System z パッケージを格納する新規パッケージ・グループを作成するか、システム上の既存のパッケージ・グループを使用するかを指定します。同じパッケージ・グループにパッケージをインストールする場合、それらは共通ワークベンチを共用し、異なるパッケージの機能はそのワークベンチで結合されます。これはシェル共用として知られています。異なるパッケージ・グループにインストールされたパッケージはワークベンチを共用せず、互いに別々に保持されます。選択が終了したら、「次へ」をクリックします。
- Developer for System z に新規パッケージ・グループを作成するには、「新規パッケージ・グループの作成」をクリックします。新規パッケージ・グループに使用するインストール・ディレクトリーを入力します。このディレクトリーは、パッケージ・グループにインストールされるパッケージに固有のリソースが保管される場所です。システム上に作成するパッケージ・グループごとに、個別のインストール・ディレクトリーを持ちます。このディレク

トリーは、異なるパッケージ・グループのパッケージによる共有が可能なりソースがインストールされている共有リソース・ディレクトリーとは異なります。「次へ」をクリックします。

注: 64 ビット・オペレーティング・システムにインストールする場合は、32 ビットのパッケージ・グループまたは 64 ビットのパッケージ・グループのいずれを作成するか、「インストール・ディレクトリー」フィールドの下に対応するラジオ・ボタンで選択できます。32 ビットのパッケージ・グループを選択する場合は、インストールされるパッケージは 32 ビット・モードで実行されます。既存のパッケージ・グループのビット・モードを、パッケージ・グループの作成後に変更することはできません。一部のソフトウェア・パッケージは、32 ビット・モードのみ、または 64 ビット・モードのみをサポートする場合があります、同一のアーキテクチャーで構成されたパッケージ・グループ内のみインストールすることができます。

- Developer for System zを既存のパッケージ・グループにインストールするには、「**既存のパッケージ・グループの使用**」をクリックします。その後、Developer for System z のインストール先にするパッケージ・グループを選択します。「次へ」をクリックします。選択したパッケージ・グループが Developer for System z との互換性がない場合は、互換性のあるパッケージ・グループを選択するか、新規パッケージ・グループを作成するようプロンプトが出されます。
- 6. 次の「**ロケーション**」パネルで、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張して、インストールするパッケージ内の機能を追加するかを指定できます。このオプションを選択するには、IBM Java Development Kit (JDK) バージョン 1.6 以降を使用する Eclipse バージョン 4.2.2 が必要です。
 - Eclipse IDE および JDK は、既存のものを拡張するのではなく、Developer for System z と一緒にパッケージされたものを使用するには、「次へ」をクリックします。
 - 既存の Eclipse IDE を拡張するには、「**既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing Eclipse IDE)**」を選択します。「**Eclipse IDE**」フィールドに、Eclipse 実行可能ファイル (Windows システムでは eclipse.exe、Linux システムでは eclipse) が入ったフォルダーのロケーションを指定します。「**Eclipse IDE JVM**」フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。「次へ」をクリックします。
- 7. 「**フィーチャー**」ページの「**翻訳版 (Translations)**」で、このパッケージ・グループ用にインストールする言語を選択します。Developer for System z のユーザー・インターフェースおよび資料は、その言語でインストールされます。

注: この選択は、このパッケージ・グループにインストールされたすべてのパッケージに適用されます。

注: このリリースの Developer for System z では、使用可能な言語のいずれかを選択すると、インストールされるすべての言語の各国語翻訳ができます。

- 8. 次の「**フィーチャー**」ページで、Developer for System z およびインストールするバンドル・オファリング用にインストールするフィーチャーを選択します。ガイド付きインストールを実行している場合、フィーチャー・セットは、インストール・ウィザードでの質問の回答に基づき、デフォルトで選択されます。

フィーチャーの説明を表示するには、フィーチャーの名前をクリックします。フィーチャーの記述は、パネル下部にある「詳細」セクションに表示されます。Developer for System z の使用可能なフィーチャーについて詳しくは、12 ページの『フィーチャーのインストール』を参照してください。Developer for System z にバンドルされているオフリングの使用可能なフィーチャーについては、それらのオフリングの資料を参照してください。

インストールするフィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。

9. 「ヘルプ・システム構成 (help system configuration)」ページ上で、ヘルプ・システムにアクセスする方法を指定してから、「次へ」をクリックします。
10. z/OS 接続パネルでは、新規ワークスペースを使用して初めて Developer for System z ワークベンチを起動するときに作成されるリモート z/OS 接続をオプションで構成します。Developer for System z はサーバーに接続して、ワークベンチの構成設定を自動的に取得します。この自動取得機能により、各クライアントを個別に構成することなく、共通の構成設定を複数のユーザーにロールアウトするのに役立ちます。

このフィーチャーについて詳しくは、「Developer for System z ホスト構成リファレンス」(SA88-4226) の『クライアントへのプッシュ機能に関する考慮事項』を参照してください。

デフォルトでは、z/OS 接続構成は使用不可になっています。z/OS 接続を構成しない場合は、「z/OS 接続をすぐに構成する」チェック・ボックスのチェック・マークを外し、「次へ」をクリックします。このフィーチャーを使用可能にして z/OS 接続設定を入力するには、以下のステップを実行します。

- a. 「z/OS 接続をすぐに構成する」チェック・ボックスを選択します。
 - b. 「ホスト名」フィールドに Developer for System z サーバーのホスト名を入力します。
 - c. 「接続名」フィールドで、この接続に使用する名前を Developer for System z の「リモート・システム」ビューに入力します。
 - d. サーバー認証方式に「userid/password」または「certificate」を選択します。
 - e. Developer for System z サーバーのデーモン・ポートを「デーモン・ポート」フィールドに入力します。
 - f. 「次へ」をクリックします。新規ワークスペースを使用して初めて Developer for System z ワークベンチを起動するときに、z/OS 接続が構成されます。
11. インストールを開始する前に、「要約」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択内容がそのままであれば、「インストール」をクリックします。インストールが開始され、進行標識にインストールが完了したパーセンテージが表示されます。
 12. インストール・プロセスが完了すると、インストールの成功を確認するためのメッセージが表示されます。

現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新規ウィンドウを表示するには、「ログ・ファイルの表示 (View log file)」をクリックします。

13. 必要に応じて、Installation Manager の「**ライセンスの管理**」パネルで、インストール済みの Developer for System z および他のバンドル・オファリングのライセンスを構成します。このステップには、フローティング・ライセンス・サポートの設定、あるいは永続または期限付きライセンス・キーをインストールするための製品アクティベーション・キットのインストールなどがあります。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。

サイレント・インストール

このタスクについて

Developer for System z は、サイレント・モードでインストールすることができます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、そのユーザー・インターフェースが使用不可になるため、応答ファイルを使用して、パッケージのインストールに必要なコマンドを提供します。

サイレント・モードで Installation Manager を実行すると、バッチ処理を使用して、スクリプトによりパッケージをインストール、更新、変更、およびアンインストールできるので、便利です。

サイレント・インストールには 3 つのメインタスクがあります。

1. サイレント・インストールを複数のシステムで実行する計画の場合は、インストール・イメージを共用ドライブまたはサーバー上のロケーションにコピーします。
2. 応答ファイルを作成する
3. Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行する

以下の各セクションでは、インストール・イメージを共用ドライブまたはサーバーにコピーする操作について説明します。残りの操作 (応答ファイルを作成し、サイレント・モードで Installation Manager を実行してパッケージをインストールする操作) の最新情報については、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/index.jsp>) を参照してください。

『サイレント・モードでの作業』というトピック (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/topic/com.ibm.silentinstall12.doc/topics/t_silentinstall_overview.html) にこれらの操作に関する詳細情報があります。

共用ドライブまたはサーバーへのインストール・イメージのコピー

このタスクについて

サイレント・インストールを複数のシステムで実行する計画の場合は、インストール・イメージを、イントラネット内の他のシステムがアクセスできるように共用ドライブ上のロケーションにコピーします。

インストール・イメージを物理インストール・ディスクから共用ロケーションにコピーするには、以下の手順を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク を DVD ドライブに挿入します。
2. *Developer for System z* インストール・ディスク の内容を、インストール・イメージを保管する共用ロケーションにコピーします。
3. *Developer for System z* にバンドルされている他のオフアリングをサイレント・インストール可能にする場合は、それらのオフアリングに対して、前述のプロセスを実行します。
 - a. バンドル・オフアリング・インストールが 1 枚のインストール・ディスクに収録されている場合は、そのインストール・ディスクの内容を、ステップ 1 で作成したディレクトリーにコピーします。バンドル・オフアリングが複数のインストール・ディスクに入っている場合は、以下の手順を行います。
 - 1) バンドル・オフアリングの製品インストール・ファイルを格納するための新規ディレクトリーを共用ロケーションに作成します。このディレクトリーには、任意の名前を付けることができます。
 - 2) 製品インストール・ファイルを格納するために作成したディレクトリー内に、インストール・ディスクごとに diskN ディレクトリーを作成します。N は、インストール・ディスクの番号に対応します。各インストール・ディスクの内容を、そのディスク用に作成した対応する diskN ディレクトリーにコピーします。

インストール・ディスクの内容を共用ロケーションにコピーし終えたら、応答ファイルの作成およびサイレント・インストールの実行を開始することができます。

インストール・イメージを電子イメージから共用ロケーションにコピーするには、以下の手順を行います。

1. サイレント・インストール可能にするバンドル・オフアリングおよび *Developer for System z* のダウンロードした圧縮ファイルそれぞれを、イメージを保管する共用ロケーションに解凍します。代わりに、圧縮ファイルをローカル・システムに解凍してから、その解凍ファイルおよびディレクトリーを共用ロケーションにコピーすることもできます。
2. 共用ロケーションで、以下のファイルが揃っていることを確認します。
 - a. 共有ディレクトリーのルートには、以下のディレクトリーがあります。
 - RDz901_Setup
 - RDz901
 - サイレント・インストール可能にするバンドル・オフアリングごとに 1 つのディレクトリー。選択可能なバンドル・オフアリングは、購入した *Developer for System z* の版によって異なります。
 - b. **RDz901** ディレクトリー、および共用ロケーションにコピーしたバンドル・オフアリングごとのディレクトリーに、1 つ以上の diskN ディレクトリーが必要で、製品のインストール・ディスク 1 枚に 1 つのディレクトリーが対応します。

共用インストール・イメージのディレクトリー構造を確認し終えたら、応答ファイルの作成およびサイレント・インストールの実行を開始することができます。

代わりに、インストール・イメージを HTTP Web サーバー上のリポジトリーにコピーし、そのリポジトリーを使用してサイレント・インストールを実行できます。

リポジトリを作成するには、IBM Packaging Utility を使用します。詳しくは、29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

第 6 章 ポストインストール作業

ヘルプ・コンテンツの構成

デフォルトのヘルプ配信では、Web からコンテンツを動的に取得します。このリモート・ヘルプでは、製品内から常に最新のコンテンツを利用できます。ご使用のコンピュータに、ヘルプ・コンテンツをローカルにインストールすることもできます。

ヘルプのインストールおよび構成に関する追加情報は、『ヘルプ・コンテンツの構成』(Eclipse クライアントのヘルプ・コンテンツの構成) を参照してください。

ヘルプ・コンテンツをローカルにインストールする方法については、次のいずれかのトピックを参照してください。

- ヘルプ更新プログラム・サイトからのヘルプ・コンテンツのダウンロード (ヘルプ・コンテンツの更新)
- ヘルプ・ダウンロード・サイトからヘルプ・コンテンツをダウンロード (ヘルプ・コンテンツをパブリック・サイトからローカルにインストール)。

注: ヘルプ・ダウンロード・サイトからのヘルプ・コンテンツのダウンロードでは、RDz901_updateSite.zip ファイルを使用します。インターネットにアクセスできない場合は、Developer for System z セットアップおよびインストール・ディスク、ならびに Developer for System z クイック・スタート・ディスクの documentation\help フォルダにある RDz901_updateSite.zip ファイルを使用することもできます。

EXEC CICS、EXEC SQL、EXEC DLI の各ステートメントのコンテキスト・ヘルプを有効にする操作

EXEC CICS、EXEC SQL、EXEC DLI の各ステートメントのコンテキスト・ヘルプを有効にするには、IMS インフォメーション・センターと CICS インフォメーション・センターにアクセスする必要があります。

これらのインフォメーション・センターのオンライン版は、以下の場所にあります。

CICS: <http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/cicsts/v5r1/index.jsp>

IMS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dzichelp/v2r2/index.jsp>

IMS インフォメーション・センターと CICS インフォメーション・センターをローカル・マシンやイントラネット・サーバーにインストールすることもできます。IMS インフォメーション・センターの取得、インストール、および初期化について詳しくは、40 ページの『Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールと初期化』を参照してください。CICS インフォメーション・センターを取得し、インストールし、初期化するた

めの情報については、41 ページの『CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターのインストールと初期化』を参照してください。

Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールと初期化

Information Management Software for z/OS Solutions インフォメーション・センターは、Microsoft Windows XP Professional システムに対応したインストール可能なインフォメーション・センターとして用意されています。インストール可能なインフォメーション・センターは、ローカル・システムでもイントラネットの Windows システムでも実行できます。

Information Management for z/OS Solutions インフォメーション・センター DVD (SK5T-7377) は、IBM Publication Center から低価格で注文できます。インストール可能なインフォメーション・センターは、英語版だけの対応になっています。国や地域によっては、注文できない可能性があります。Information Management for z/OS Solutions インフォメーション・センター DVD を注文するには、以下のようになります。

1. IBM Publications Web サイトにアクセスします。
2. ドロップダウン・メニューから国、地域、言語を選択して、「Go」をクリックします。
3. 次に表示されるページで「Search for publications」を選択します。
4. 「Quick Publications Center search」ページの「Publication number」フィールドに SK5T-7377 と入力して、「Go」をクリックします。

IMS インフォメーション・センター DVD を受け取ってインフォメーション・センターをインストールしたら、インフォメーション・センターに用意されている手順を実行して最新の更新を取得してください。

注: IMS インフォメーション・センターのインストール時に、最新の DB2 および IMS のトピックのみをインストールすることを選択できます。EXEC SQL ステートメントと EXEC DLI ステートメントのコンテキスト・ヘルプを有効にするために必要なのは、これらのトピックだけです。

注: IMS インフォメーション・センターは、Microsoft Windows システム版だけに用意されています。Linux システムを使用している場合は、オンライン版のインフォメーション・センターを使用するか、イントラネットでアクセスできる Microsoft Windows のサーバーにインストールしてください。

EXEC SQL ステートメントと EXEC DLI ステートメントのコンテキスト・ヘルプを有効にするには、インフォメーション・センターのインストール場所へ移動し、IC_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化します。このルーチンを実行すると、ポート 8801 でインフォメーション・センターが初期化されます。コンテキスト・ヘルプでヘルプ情報を検索できるようにするには、8801 ポートでインフォメーション・センターを初期化する必要があります。

注: 「スタート」メニューのショートカットを使用して IMS インフォメーション・センターを初期化すると、ポート番号がランダムに割り当てられます。「スター

ト」メニューに用意されているショートカットを使用した場合は、コンテキスト・ヘルプで該当資料を見つけて表示することができなくなります。

IMS インフォメーション・センターを開くには、IC_start.bat の実行後にブラウザで <http://127.0.0.1:8801/help/index.jsp> にリンクします。

CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターのインストールと初期化

CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターは、Microsoft Windows、Linux、AIX® の環境で実行できます。IBM Publications Center にプラットフォームごとのパッケージが用意されています。各パッケージには、ワークステーションまたはサーバーでインフォメーション・センターを実行するために必要なすべての Eclipse コードと CICS 資料が含まれています。

CICS インフォメーション・センターをダウンロードするには、以下のようになります。

1. IBM Publications Center Web サイト (<http://www.ibm.com/e-business/linkweb/publications/servlet/pbi.wss>) にアクセスします。
2. 「Search for publications」をクリックして、該当する資料番号を入力します。
SK4T-2664 CICS Transaction Server Version Information Center for AIX
SK4T-2665 CICS Transaction Server Version Information Center for Linux
SK4T-2666 CICS Transaction Server Version Information Center for Windows
3. インフォメーション・センター・パッケージをダウンロードします。
4. パッケージを解凍し、README ファイルの説明に従ってインフォメーション・センターをインストールします。各パッケージは、.zip ファイルとして圧縮されています。この .zip ファイルには、Linux、AIX、z/OS システムに対応した正しい圧縮ファイル形式の内容が含まれています。

インフォメーション・センターをインストールしたら、インフォメーション・センターに用意されている手順を実行して最新の更新を取得してください。

EXEC CICS ステートメントのコンテキスト・ヘルプを有効にするには、インフォメーション・センターのインストール場所に移動し、IC_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化します。CICS CICS インフォメーション・センターを開くには、help_cd_start.bat を実行するか、IC_start.bat を実行してから、ブラウザで <http://127.0.0.1:9999/help/index.jsp> にリンクします。

管理、ライセンス

インストールした IBM ソフトウェアとカスタマイズしたパッケージのライセンスは、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理されます。「ライセンスの管理」ウィザードは、ライセンス情報を表示して、インストール済みパッケージごとに、ライセンスを構成するために使用できます。

一部の Rational 製品に付属する試用版ライセンスは、インストール後、30 日または 60 日経過すると有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブ化する必要があります。「ライセンスの管理」ウィザードを使用すると、製品アクティベーション・キットをインポートすることにより、試用版オフ

ァリングをライセンス版にアップグレードすることができます。また、試用版ライセンスまたは永続ライセンスのオファリングに対して、フローティング・ライセンスの適用を有効にして、ライセンス・サーバーからフローティング・ライセンス・キーを使用することもできます。

- Rational 製品のライセンスの管理について詳しくは、Rational ライセンス・サポート・ページ (<http://www-306.ibm.com/software/rational/support/licensing/>) を参照してください。

許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、特定の単一の個人に、Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、何らかの形で製品にアクセスする個々のユーザーごとに、許可ユーザー・ライセンスを取得する必要があります。許可ユーザー・ライセンスは、購入者が長期的または永続的に、元の譲受人を置き換えない限り、再割り当てすることはできません。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合は、そのライセンスを特定の個人 1 名に割り当てることができ、その人が対応する Rational ソフトウェア製品を使用できます。許可ユーザー・ライセンスは、ライセンスを受けた人が積極的に使用しない場合であっても、いかなる時点においても、別のの人にその製品の使用权を与えるものではありません。

フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、複数のチーム・メンバー間で共有が可能な単一ソフトウェア製品に対するライセンスです。ただし、同時ユーザーの総数は、購入フローティング・ライセンスの数を超えてはなりません。例えば、Rational ソフトウェア製品のフローティング・ライセンスを 1 つ購入した場合、組織内の任意のユーザーが任意の時期に製品を使用することができます。その製品にアクセスしたい別の人は、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを取得して、それを Rational ライセンス・サーバーにインストールする必要があります。サーバーはエンド・ユーザーのライセンス・キーへのアクセス要求に応答します。アクセスが認可されるのは、組織で購入したライセンス数に一致する数の同時ユーザーです。

注: Rational Developer for System z でフローティング・ライセンス (トークン・ライセンスを含む) を使用する場合、製品をインストールする前にライセンス・キー・サーバーを Rational License Key Server バージョン 8.1.2 以降にアップグレードする必要があります。Rational License Key Server バージョン 8.1.2 以降は、製品の以前のバージョンでも使用できます。Rational License Key Server のバージョン 7.1 以前をバージョン 8.1.2 以降にアップグレードする方法については、『Migrating to Rational Common Licensing』(http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html) を参照してください。

トークン・ライセンス

トークン・ベースのライセンス・モデルは、一定数のトークン・ライセンスを購入できることを意味します。トークン・ベースのフィーチャー (FEATURE) をチェックアウトする Rational ツールを使用した場合は、ライセンス・ファイルのフィーチャー (FEATURE) 行により、チェックアウトされるトークンの数が指定されます。

トークン・ベースのライセンスは、フローティング・ライセンスでしか使用できません。許可ユーザー・ライセンスには使用できません。

注: Rational Developer for System z でフローティング・ライセンス (トークン・ライセンスを含む) を使用する場合、製品をインストールする前にライセンス・キー・サーバーを Rational License Key Server バージョン 8.1.2 以降にアップグレードする必要があります。Rational License Key Server バージョン 8.1.2 以降は、製品の以前のバージョンでも使用できます。Rational License Key Server のバージョン 7.1 以前をバージョン 8.1.2 以降にアップグレードする方法については、『Migrating to Rational Common Licensing』(http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html) を参照してください。

トークン・ライセンス交付の詳細については、最寄りの IBM 営業担当員にお尋ねください。

ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または製品の使用を継続するためにライセンスを延長する場合に、製品のライセンスを使用可能にする方法は 2 通りあります。

Rational Software Development Platform オファリングのライセンスは、以下の 2 通りの方法で使用可能にされます。

- 製品アクティベーション・キットをインポートする
- Rational Common Licensing を有効にして、フローティング・ライセンス・キーにアクセスできるようにする

注: 一部の Rational 製品に付属する試用版ライセンスは、インストール後、30 日または 60 日経過すると有効期限が切れます。有効期限後も製品を使用するには、その製品をアクティブ化する必要があります。

アクティベーション・キット

製品アクティベーション・キットには、試用版 Rational 製品の永続ライセンス・キーまたは期限付きライセンス・キーが含まれています。アクティベーション・キットを購入し、アクティベーション・キットの .zip ファイルをローカル・コンピューターにダウンロードしてから、アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートし、製品のライセンスを使用可能にします。アクティベーション・キットを製品にインポートするには、IBM Installation Manager を使用します。

フローティング・ライセンスの適用

オプションで、フローティング・ライセンス・キーを入手して、IBM Rational License Server をインストールし、ご使用の製品でフローティング・ライセンスを適用を有効にします。フローティング・ライセンスを適用することには、以下の利点があります。

- 組織全体にわたりライセンス準拠が適用される
- ライセンス購入数が少なく済む
- IBM Rational Team Unifying and Software Development Platform デスクトップ製品のライセンス・キーを同一ライセンス・サーバーから提供できる

アクティベーション・キットおよびフローティング・ライセンスの取得について詳しくは、46 ページの『ライセンスの購入』を参照してください。

インストール済みパッケージのライセンス情報の表示

このタスクについて

インストール済みパッケージのライセンス情報は、ライセンス・タイプおよび有効期限を含めて、IBM Installation Manager から確認することができます。

ライセンス情報を表示するには、以下の手順を行います。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「メイン」ページで「ライセンスの管理」をクリックします。

パッケージ・ベンダー、現在のライセンス・タイプ、および有効期限は、インストール済みパッケージごとに表示されます。

製品アクティベーション・キットをインポートする

このタスクについて

永続ライセンス・キーまたは期限付きライセンス・キーをインストールするには、IBM Installation Manager を使用してダウンロード・ロケーションまたは製品メディアからアクティベーション・キットをインポートします。

アクティベーション・キットを購入していない場合は、最初にそれを購入する必要があります。製品または製品アクティベーション・キットを購入している場合は、該当するディスクを挿入するか、またはアクティベーション・キットを IBM パスポート・アドバンテージから、アクセス可能なワークステーションにダウンロードします。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ(.jar) ファイルとしてパッケージされています。.jar ファイルは永続ライセンス・キーを含みます。このファイルをインポートして、ご使用の製品をアクティブ化する必要があります。

アクティベーション・キット .jar をインポートして、新しいライセンス・キーを有効にするには、以下の手順を行います。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「メイン」ページで「ライセンスの管理」をクリックします。
3. パッケージを選択し、「アクティベーション・キットのインポート」ボタンをクリックします。

4. 「次へ」をクリックします。現在のライセンスの種類、およびライセンスのバージョン範囲など、選択したパッケージの詳細が表示されます。
5. メディア・ディスクまたはアクティベーション・キットのダウンロード・ロケーションのパスを参照し、該当する Java アーカイブ (.jar) ファイルを選択して、「開く」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックします。「要約 (Summary)」ページに、アクティベーション・キットのターゲット・インストール・ディレクトリ、新規ライセンスの適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「完了」をクリックします。

永続ライセンス・キーを含む製品アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「ライセンスの管理」ウィザードに、インポートが正常に終了したかどうかが表示されます。

フローティング・ライセンスの使用可能化

このタスクについて

チーム環境がフローティング・ライセンスの適用をサポートしている場合は、製品のフローティング・ライセンスを使用可能にして、フローティング・ライセンス・キーにアクセスできるように接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの適用を有効にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手します。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing による管理について詳しくは、「*IBM Rational License Management Guide*」を参照してください。

指定されたパッケージのライセンス・タイプとしてフローティング・ライセンスを使用可能にして、ライセンス・サーバー接続を構成するには、以下を行います。

1. Rational Software Development Platform の IBM Installation Manager で、「ファイル」>「開く」>「ライセンスの管理」をクリックします。
2. パッケージのバージョンを選択し、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」をクリックします。「次へ」をクリックします。
3. 「フローティング・ライセンスの適用を有効にする」をクリックします。
4. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を以下のように構成します。
 - a. 「サーバー」テーブルで空のフィールドをクリックするか、または「追加」をクリックします。
 - b. 管理者から代替サーバー環境に関する情報を受け取った場合は、「代替サーバー」をクリックします。1 次サーバー、2 次サーバー、および 3 次サーバーの名前とポートのフィールドが表示されます。
 - c. 「名前」フィールドにライセンス・サーバーのホスト名を入力します。
 - d. (オプション) ファイアウォールが使用される環境の「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示されない限り、このポートには値を割り当てないでください。
 - e. 代替サーバー環境の場合は、2 次サーバーおよび 3 次サーバーの名前と (必要ならば) ポートを入力します。

- f. (オプション) 接続情報が正しいことと、サーバーが使用可能であることを確認するため、「**接続のテスト**」をクリックします。
 - g. 「**OK**」をクリックします。
5. 「**次へ**」をクリックします。
6. (オプション) シェル共有パッケージまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リストのライセンスの順序は、パッケージが、特定のライセンス・パッケージのライセンス・キーへのアクセスを試みる順序を決定します。「**完了**」をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードが、フローティング・ライセンスの構成が正常に終了したかどうかを示します。

ここで、有効になった製品を次に開くと、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを取得するために、ライセンス・サーバーとの間に接続が作成されます。

ライセンスの購入

このタスクについて

現行製品ライセンスの期限切れが近づいている場合、またはチーム・メンバー用に製品ライセンスを追加で取得したい場合、新規ライセンスを購入できます。

ライセンスを購入して製品を有効にするには、以下の手順を完了します。

1. 購入したいライセンスのタイプを決定します。
2. ibm.com® にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取って、製品ライセンス製品を購入します。詳しくは、ソフトウェアのご注文方法 に関する IBM Web ページを参照してください。
3. 購入するライセンスのタイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを行って、ご使用の製品を有効にします。
 - 製品の許可ユーザー・ライセンスを購入した場合は、*Passport Advantage* にアクセスし、説明に従って、製品アクティベーション・キット・ファイルをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードした後に、*Installation Manager* を使用して、プロダクト・アクティベーション用の .jar ファイルをインポートします。
 - 製品のフローティング・ライセンスを購入する場合は、*IBM Rational Licensing and Download* サイト へのリンクをクリックし、ログインして (IBM への登録が必要)、IBM Rational ライセンス・キー・センターに接続するためのリンクを選択します。その後、ライセンス証書を使用して、ご使用のライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得します。

オプションで、*Passport Advantage* にアクセスして、製品用のアクティベーション・キットをダウンロードすることもできます。長期間コンピューターをオフラインで使用する場合は、オプションで、アクティベーション・キットをインポートした後に、フローティング・ライセンス・タイプから永久ライセンス・タイプに切り替えることができます。

アクティベーション・キットをインポートするか、製品のフローティング・ライセンス・サポートを使用可能にするには、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

ライセンスのサイレント・インストールおよび設定

製品ライセンスをインポートして、サイレントにフローティング・ライセンス・サポートを設定できます。これは、パッケージをサイレントにインストールできるのと同じように行えます。ライセンスを構成するために、IBM Installation Manager が使用する応答ファイルを生成する必要があります。応答ファイルの記録、およびサイレント・インストールの実行について詳しくは、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。応答ファイルを記録する場合は、「ライセンスの管理」パネルを使用して、アクティベーション・キットをインポートするか、フローティング・ライセンス・サポートの設定を行ってから、Installation Manager を終了します。これらのタスクをサイレントに実行するために必要な情報が応答ファイルに書き込まれます。

Linux コンピューター上でのファイル・ハンドル数の増加

製品のパフォーマンスを最大限に高めるには、ファイル・ハンドル数をデフォルト値の 1024 より増やします。

始める前に

重要: Rational 製品で作業する前に、ファイル・ハンドルの数を増やしてください。大部分の Rational 製品では、プロセスのデフォルトの制限である 1024 個を超えるファイル・ハンドルを使用します。システム管理者は、この変更を行う必要がある場合があります。

このタスクについて

注意:

必ず、以下の手順を正しく完了します。この手順が正しく完了されない場合は、コンピューターは始動しません。

Linux コンピューター上でファイル・ハンドルの数を増やすには、以下の手順を完了します。

手順

1. root としてログインします。root アクセス権限を持っていない場合は、取得する必要があります。
2. etc ディレクトリに変更します。

重要: 次のステップでファイル・ハンドルの数を増やす場合は、空の `initscript` ファイルをコンピューターに残さないでください。残した場合、次にリスタートしたときに、コンピューターは始動しません。

3. vi エディターを使用して、etc ディレクトリ内の `initscript` ファイルを編集します。このファイルが存在しない場合は、`vi initscript` と入力して、作成します。
4. 1 行目で、`ulimit -n 4096` と入力します。選択した数である 4096 は、大部分の Linux コンピューターのデフォルトの 1024 よりも著しく大きくなります。

重要: ハンドル数にあまり大きな値を設定しないでください。そのような設定をすると、システム全体のパフォーマンスに悪影響を与える可能性があるからです。

5. 2 行目で、`eval exec "$4"` と入力します。
6. 手順 4 (47 ページ) および 5 を完了してから、保存し、ファイルを閉じるようにします。
7. オプション: `etc/security` ディレクトリーにある `limits.conf` ファイルを変更することにより、ユーザーまたはグループで使用可能なハンドルの数を制限します。このファイルがない場合は、ステップ 4 (47 ページ) で、より小さい数 (2048 など) を使用することを検討して、プロセス当たり許可されるオープン・ファイルの数に対する制限が、大部分のユーザーにとって十分に小さいものになるようにします。このステップを行うことは、ステップ 4 (47 ページ) で、比較的小さい数を使用した場合は、それほど重要ではありません。しかし、ステップ 4 (47 ページ) で大きい数を設定しておいて、`limits.conf` ファイルに制限を設定しない場合はコンピューターのパフォーマンスが著しく低下する可能性があります。

以下のサンプル `limits.conf` ファイルでは、すべてのユーザーを制限してから、後でそれ以外の制限を設定します。このサンプルでは、ステップ 4 (47 ページ) で、ハンドルの数を 8192 に設定したと想定しています。

```
*      soft nfile 1024
*      hard nfile 2048
root   soft nfile 4096
root   hard nfile 8192
user1  soft nfile 2048
user1  hard nfile 2048
```

例での「*」は、まず、すべてのユーザーに制限を設定することに注意してください。この制限は、後に続く制限よりも小さい制限です。root ユーザーに許可されるオープン・ハンドルの数の方が大きくなっています。一方、user1 が使用可能な数はその 2 つの間です。変更を行う前に、必ず、`limits.conf` ファイル内のドキュメンテーションを読んで、理解してください。

Linux オペレーティング・システムの追加構成要件

Linux オペレーティング・システムを使用する場合は、ご使用のコンピューターが、このトピックにリストされた要件を満たしていることを確認する必要があります。

64 ビットのシステムでは 32 ビットの xulrunner パッケージが必要

64 ビットの Linux システムで Developer for System z が 32 ビットのパッケージ・グループにインストールされている場合は、32 ビット版の xulrunner パッケージをインストールする必要があります。このパッケージがインストールされていないと、製品を実行したときに以下のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
org.eclipse.swt.SWTError: No more handles
[Unknown Mozilla path (MOZILLA_FIVE_HOME not set)]
```

通常は、Linux ディストリビューションと一緒にインストールされるパッケージ・マネージャーを使用して、32 ビットの xulrunner パッケージを見つけてインストールできます。(例えば、Red Hat Linux では YUM、SUSE Linux では YaST を使用できます。) 別の方法としては、Linux ディストリビューションの更新サイト、32 ビットの Linux ディストリビューション・ディスク (使用可能な場合)、他の RPM パッケージ配布ソースのいずれかから 32 ビットの xulrunner RPM をダウンロードし、**rpm** コマンドでインストールすることもできます。以下に、その例を示します。

```
rpm -Uvh <xulrunner module name>
```

Firefox または Mozilla ブラウザー用の環境変数の設定が必要な場合がある

環境変数 MOZILLA_FIVE_HOME を Firefox または Mozilla インストールが含まれるフォルダーに設定する必要がある場合があります。例えば、setenv MOZILLA_FIVE_HOME /usr/lib/firefox-1.5 のように設定します。

この環境変数を設定しないと、製品の実行時に以下のエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
org.eclipse.swt.SWTErrors: No more handles
[Unknown Mozilla path (MOZILLA_FIVE_HOME not set)]
```

Firefox ブラウザーは動的にリンクされる必要がある

SWT ブラウザー・ウィジェットをサポートするには、ご使用の Firefox ブラウザーを動的にリンクする必要があります。つまり、Firefox ブラウザーが、mozilla.org からダウンロードされているのではなく、ソースからコンパイルされている場合です。通常、Firefox がディストリビューションの一部として提供された (つまり、/usr/lib/firefox などの場所にある) 場合が、これに当たります。

これが当てはまることを確認する 1 つの方法として、そのブラウザーが /etc/gre.conf によって指されているブラウザーであるかどうかを調べます。この gre.conf ファイルの目的は、組み込み可能ブラウザーを指すことです。

ご使用のブラウザーが動的にリンクされていないと、製品を実行したときに以下のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
org.eclipse.swt.SWTErrors: No more handles
(java.lang.UnsatisfiedLinkError:
/home/n0002466/.eclipse/ibm.software.development.platform_7.0.0
/configuration/org.eclipse.osgi/bundles/267/1/.cp/libswt-mozilla-gtk-3236.so
(libxpcor.so: cannot open shared object file: No such file or directory))
SUSE Linux might require a fix for invisible text problem.))
```

テキストが表示されない問題に対するフィックスが SUSE Linux で必要な場合がある

ご使用のオペレーティング・システムが SUSE Linux Enterprise Desktop 10 SP1 または SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 の場合、エディターによってはテキストが表示されないという問題を解決するため、以下のオペレーティング・システム更新が必要な場合があります。

<http://support.novell.com/techcenter/psdb/44ab155e3202595389c101e6cf7e20f2.html>

第 7 章 Developer for System z の開始

このタスクについて

Developer for System z は、Windows デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから、以下のようにして開始することができます。

- Windows の「スタート」メニューから IBM Rational Developer for System z を開始するには、「スタート」 > 「すべてのプログラム」 > 「[package groupname]」 > 「IBM Rational Developer for System z」 > 「IBM Rational Developer for System z」をクリックします。
- Linux システム上で IBM Rational Developer for System z を開始するには、デスクトップ環境のアプリケーションのショートカット・メニューで「IBM Rational Developer for System z」ショートカットをクリックします。

•

Windows

コマンド行から Developer for System z を開始するには、*product installation directory*¥eclipse.exe と入力します。

•

Linux

コマンド行から Developer for System z を開始するには、*product installation directory*/eclipse と入力します。

第 8 章 インストール済みパッケージの変更

始める前に

インストール済み環境を変更するために、元のインストール・メディアおよび更新メディアへのアクセスが必要になることがあります。詳しくは、*Installation Manager* ヘルプを参照してください。

注: インストールを変更する前に、*Installation Manager* を使用してインストールされたすべてのプログラムを閉じてください。

このタスクについて

IBM *Installation Manager* の「パッケージの変更」を使用すると、フィーチャーを追加または除去することによって、インストール済みパッケージの内容を変更できます。この機能は、IBM *Installation Manager* を使用してインストールされたパッケージでのみ使用可能です。

注: Eclipse ロケーションまたは JVM を変更することはできません。

手順

インストール済みパッケージを変更するには、以下の手順を行います。

1. *Installation Manager* のメインパネルから、「パッケージの変更」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」パネルで、変更するパッケージが入ったパッケージ・グループを選択します。インストールされているパッケージを判別するためにヘルプが必要な場合は、「キャンセル」をクリックし、「ファイル」をクリックして、「インストール済みパッケージの表示」をクリックします。システムにインストール済みのパッケージ・グループおよびパッケージが表示されます。準備が整ったら、「パッケージの変更」を再びクリックし、パッケージ・グループを選択して、「次へ」をクリックします。
3. 「言語」パネルで、追加または除去する言語を選択または選択解除し、「次へ」をクリックします。
4. 「フィーチャー」パネルで、現在インストールされているフィーチャーがすでに選択されています。インストールする追加のフィーチャーを選択するか、削除するインストール済みフィーチャーをクリアします。選択が終了したら、「次へ」をクリックします。
5. インストール済み環境の変更を開始する前に、「要約」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。選択項目が適切である場合は、「変更」をクリックして、指定した変更を行います。変更プロセスが開始され、進行標識にプロセスが完了したパーセンテージが示されます。
6. 「完了」ページに結果が表示された後、「ログ・ファイルの表示 (View Log File)」をクリックして、全インストール・ログを表示します。

第 9 章 インストール済みパッケージの更新

始める前に

更新する前に、Installation Manager を使用してインストールされたすべてのプログラムを閉じてください。

このタスクについて

IBM Installation Manager を使用して、Installation Manager によってインストールされたパッケージの製品更新および新規フィーチャーをインストールできます。

デフォルトでは、システムからアクセス可能なローカル更新リポジトリまたはネットワーク更新リポジトリをリポジトリ設定が指している場合を除き、更新をインストールするにはインターネット・アクセスが必要です。詳しくは、*Installation Manager* ヘルプ を参照してください。

パッケージ更新を検索してインストールするには、以下の手順を行います。

1. 特定のリポジトリ、例えば、イントラネット内の HTTP Web サーバー上に保管されているリポジトリから更新をインストールするには、先に進む前に、Installation Manager 設定でリポジトリ・ロケーションを指定する必要があります。Installation Manager で更新のインターネット検索を行うときは、このステップを実行する必要はありません。

注: Installation Manager 設定でリポジトリの指定を行った場合、Installation Manager は、指定されたりポジトリの検索に加えて、更新のインターネット検索も行います Installation Manager で更新の検索を行いたくなければ、「ファイル」->「設定」と進み、「リポジトリ」パネル下部にある「インストール中および更新中のサービス・リポジトリの検索」チェック・ボックスを選択解除します。こうすると、Installation Manager に対して、インターネットで検索を行わずに、設定で指定されたりポジトリでのみ検索するように指示することになります。

2. Installation Manager のメインパネルから、「更新」をクリックします。
3. 「パッケージの更新」パネルで、変更するパッケージが入ったパッケージ・グループを選択します。インストールされているパッケージを判別するためにヘルプが必要な場合は、「キャンセル」をクリックし、「ファイル」->「インストール済みパッケージの表示」をクリックします。表示されるページに、システムにインストール済みのパッケージとパッケージ・グループが示されます。すべてのインストール済みパッケージの更新の確認を行うには、「すべて更新」チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックして先に進みます。
4. Installation Manager は、インストール済みパッケージに使用可能な更新を検索します。次のパネルに、検出された選択可能な更新のリストが表示されます。
5. デフォルトでは、推奨される更新だけが表示されます。パッケージのすべての更新を表示するには、「すべて表示」をクリックします。更新は、必要な依存関係が事前選択された状態で表示されます。

6. インストールする更新を選択し、「次へ」をクリックします。
7. 「ライセンス」パネルで、選択した更新のご使用条件をお読みください。インストールするように選択した各更新にご使用条件があります。「ライセンス」パネルの左側にある各パッケージ名をクリックして、そのご使用条件を表示してください。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「同意する (I accept the terms of the license agreements)」をクリックします。
 - b. 「次へ」をクリックして先に進みます。
8. 更新のインストールを開始する前に、「要約」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更するには、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目が適切である場合は、「更新」をクリックして更新をインストールします。更新のインストールが開始され、進行標識にインストールが完了したパーセンテージが示されます。
9. 「完了」ページに結果が表示されます。
10. 「ログ・ファイルの表示 (View Log File)」リンクをクリックして、全インストール・ログを表示します。

第 10 章 Developer for System z のアンインストール

このタスクについて

Installation Manager の「アンインストール」オプションを使用すると、以前に Installation Manager を使用してインストールされたパッケージをアンインストールすることができます。

パッケージをアンインストールするには、そのパッケージのインストールに使用した同一のユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

Windows

アンインストール・プロセスを開始するには、以下の手順のうち 1 つを行います。

- Windows の「プログラムの追加と削除」画面から、「IBM Rational Developer for System z」(パッケージ・グループ名)を選択して、「削除」をクリックします。IBM Installation Manager が開始します。
- Windows の「スタート」メニューで、「スタート」>「すべてのプログラム」>「IBM Installation Manager」>「IBM Installation Manager」をクリックします。

注: 非管理者によるインストールの場合、「スタート」>「すべてのプログラム」>「My IBM Installation Manager」>「My IBM Installation Manager」をクリックします。

Linux

アンインストール・プロセスを開始するには、以下の手順を行います。

1. 端末ウィンドウを開きます。
2. *Installation Manager install directory/eclipse* ディレクトリーに変更します。(例: /opt/IBM/InstallationManager/eclipse)
3. **.IBMIM** を実行します。

手順

1. Installation Manager を使用してインストールしたすべてのプログラムをクローズします。
2. Installation Manager のメインパネルから、「アンインストール」をクリックします。
3. 「パッケージのアンインストール」パネルで、アンインストールするパッケージを選択します。「次へ」をクリックします。
4. 「パッケージ」ページで、アンインストールするパッケージを選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「要約」パネルで、アンインストールするために選択したパッケージを確認します。 何らかの変更を行うには、「戻る」をクリックします。アンインストール・プロセスを開始するには、「アンインストール」をクリックします。
6. アンインストールが終了すると、「完了」パネルが表示されて結果が示されます。「完了」をクリックします。

第 11 章 マイグレーション

WebSphere Developer for zSeries または WebSphere Developer for System z ワークスペースのマイグレーション

このタスクについて

WebSphere® Developer for zSeries 6.0.1 または WebSphere Developer for System z 7.0 で使用したワークスペースがあり、それを IBM Rational Developer for System z バージョン 9.0.1 で使用するためにマイグレーションしようとする場合は、以下の手順に従ってください。

1. IBM Rational Developer for System z バージョン 9.0.1 をインストールします。
2. マイグレーションするワークスペースの名前を指定して、Rational Developer for System z を開始します。古いワークスペースは、古い成果物がすべて新しいワークスペースに存在するように自動的にマイグレーションされます。
3. Rational Developer for System z バージョン 7 ワークスペースがバージョン 9.0.1 にマイグレーションされます。

注: Developer for System z は、バージョン 7、8.0、または 8.5 からバージョン 9.0.1 にアップグレードできません。バージョン 9.0.1 は、インストール場所を変えれば、Developer for System z のこれまでのすべてのバージョンと共存が可能です。

注: Developer for System z は、Windows ベースのワークスペースから Linux ベースの Developer for System z 9.0.1 ワークスペースへのマイグレーションをサポートしていません。

第 12 章 追加ソフトウェアのインストール

必要な System z コンポーネントのインストール

ホスト・コードのインストールの手順については、関連する製品のディレクトリーにある以下のインストール構成資料を参照してください。

- RDz901_zOS_SMPE (z/OS システム)
- RDz901_RSE

IBM TXSeries for Multiplatforms のインストール

このタスクについて

IBM TXSeries for Multiplatforms にはローカル CICS 開発プラットフォームが用意されているため、CICS プログラムの開発が可能です。

IBM TXSeries には専用のインストール資料のセットがあり、製品に同梱のディスクに入っています。

IBM TXSeries for Multiplatforms をインストールするには、以下を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク を挿入するか、電子イメージの RDz90_Setup ディレクトリーを開きます。
2. launchpad.exe を実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。
3. ランチパッド・ウィンドウの左側にある「オプション・ソフトウェアのインストール」タブをクリックします。
4. 「IBM TXSeries for Multiplatforms v7.1 インストールの起動」をクリックします。
5. プロンプトが出されたら、IBM TXSeries for Multiplatforms v7.1 インストール CD を挿入するか、または電子インストール・イメージを含むロケーションを指定します。
6. インストールが開始したら、画面のプロンプトに従ってインストールします。

IBM Data Studio のインストール

このタスクについて

IBM Data Studio には専用のインストール資料のセットがあり、製品に同梱のディスクに入っています。

IBM Data Studio をインストールするには、以下を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク を挿入するか、電子イメージの RDz90_Setup ディレクトリーを開きます。
2. launchpad.exe を実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。

3. ランチパッド・ウィンドウの左側にある「オプション・ソフトウェアのインストール」タブをクリックします。
4. 「**IBM Data Studio インストールの起動**」をクリックします。
5. プロンプトが出されたら、IBM Data Studio インストール CD を挿入するか、または電子インストール・イメージを含むロケーションを指定します。
6. インストールが開始したら、画面のプロンプトに従ってインストールします。

Rational Team Concert Integration for System z 拡張機能のインストール

Rational Team Concert Integration for System z 拡張機能は、以下の手順を実行することで、Developer for System z のインストール時に一緒にインストールすることができます。

1. 29 ページの『ランチパッドを使用した Developer for System z のインストール』の説明のように、ランチパッドからガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールのどちらかを選択してインストールを開始します。
2. Installation Manager が起動したときに、「Rational Team Concert - Client for Eclipse IDE」と「Rational Team Concert Integration for System z 拡張機能」が「使用可能なパッケージ」パネルにリストされます。「**Rational Team Concert Integration for System z 拡張機能**」を選択します。
3. 「**Rational Developer for System z**」または「**Rational Team Concert - Client for Eclipse IDE**」のどちらかが選択されていない場合で、選択されていないほうのパッケージをまだインストールしていないときは、それを選択します。

注:

- Rational Developer for System z は、Rational Team Concert クライアントの 2 つのバージョンおよび Rational Team Concert Integration for System z と同梱で出荷されます。バージョン 4.0.3 およびバージョン 4.0.5 両方のインストール・オプションを表示するには、「パッケージのインストール」パネルにある「すべてのバージョンを表示」チェック・ボックスを選択します。
 - Rational Team Concert バージョン 4.0.5 クライアントを使用して接続するには、Rational Team Concert Server のバージョン 4.0.5 (またはそれ以降) がインストールされていなければなりません。
4. 「次へ」をクリックし、「パッケージのインストール」ウィザードのパネルに従って、拡張機能をインストールします。

第 13 章 既知の問題および制限事項

このセクションでは、インストールおよびアンインストールにおける既知の問題と制限事項について説明します。

製品の問題および制限事項の詳細については、*IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク の Documents¥nl¥en¥readme ディレクトリーにある rdz901_releasenotes.html ファイルを参照してください。

第 14 章 IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用して、HTTP または HTTPS 経由で使用可能な Web サーバーに配置できるリポジトリにパッケージをコピーできます。

Packaging Utility ソフトウェアは、IBM Rational Enterprise Deployment ディスクに入っています。Developer for System z および他のパッケージの入ったリポジトリを、HTTP 経由で使用可能な Web サーバーに配置する場合は、Packaging Utility を使用して、それらのパッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティを使用して、以下の作業を行うことができます。

- パッケージの新規リポジトリを生成します。
- パッケージを新規リポジトリにコピーします。複数のパッケージを単一リポジトリにコピーして、IBM Installation Manager を使用した製品のインストール元となる共通ロケーションを企業内に作成することができます。
- パッケージをリポジトリから削除します。

IBM Packaging Utility をインストールして使用するための詳細な手順については、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/index.jsp>) を参照してください。『Packaging Utility でのパッケージの管理』というトピック (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r7/topic/com.ibm.cic.auth.ui.doc/topics/c_modes_pu.html) に最新情報があります。

IBM Rational Developer for System z の特記事項

© Copyright IBM Corporation 2009, 2013.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
5 Technology Park Drive
Westford, MA 01886
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で 사용할 ことができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式

においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適用されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. 2009, 2013.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標の帰属表示

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Windows は Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適

用されません。 IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標の帰属表示

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。 他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。 現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Intel および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

【ア行】

アンインストール、IBM Rational Developer for System z 57
アンインストールと Installation Manager 21
イメージ (電子)、解凍と検査 11
イメージ、共用ドライブからのインストール 12, 27
イメージ、ワークステーション上のイメージからのインストール 12, 26
インストール、インストール・ディスクから 11
インストール、共用ドライブ上のイメージから 12, 27
インストール、計画 11
インストール、サイレント 35
インストール、対象フィーチャーの決定 12
インストール、追加ソフトウェア 61
インストール、必要な System z サーバー・ツール 61
インストール、変更 53
インストール、ワークステーション上のイメージから 12, 26
インストール、HTTP サーバー上のリポジトリから 12, 28
インストール、Installation Manager 18
インストール作業 25
インストール済みパッケージ、ライセンス情報の表示 44
インストール方式 11
インストール要件、クライアント 5
インストール・ディスク、インストール 11
インストール・リポジトリ 21
オペレーティング・システム
サポート 7
要件 7

【カ行】

解凍と検査、電子イメージ 11
開発環境、統合 13
環境、System z 統合開発 13

管理、ライセンス 41
既存の Eclipse IDE、拡張 23
共用ドライブ、イメージからのインストール 12, 27
共用リソース・ディレクトリー 22
行レベル・コード・カバレッジ 13
クライアント・インストール要件 5
グループ、パッケージ 22
計画とインストール 11
検査と電子イメージ、解凍 11
コード・カバレッジ、行レベル 13
コード・レビュー 13
構成、ヘルプの
ヘルプ・コンテンツ、構成 39

【サ行】

サーバー、インストール 12, 28
サーバー、インストール・パッケージの配置 29
サーバー・ツール、必須なインストール 61
サイレント、インストール 35
作業、インストール 25
作業、プリインストール 3
作業、ポストインストール 39
サポート
オペレーティング・システム 7
使用可能化、ライセンス 43
制限事項、既知 63
設定、Installation Manager での設定 22
前提条件
オペレーティング・システム 7
ソフトウェア 7, 9
特権 10
ハードウェア 7
ブラウザー 10
ユーザー特権 10
Acrobat Reader 10
Adobe Acrobat Reader 10
DB2 Connect 9
TXSeries 9
Web ブラウザー 10
ソフトウェア
前提条件 7, 9
要件 7, 9
ソフトウェア、追加インストール 61

【タ行】

ツール、必要な System z サーバー・ツールのインストール 61
追加ソフトウェア、インストール 61
ディレクトリー、共用リソース 22
電子イメージ、解凍と検査 11
トークン・ライセンス 43
統合開発環境 13

【ハ行】

ハードウェア
前提条件 7
要件 7
配置、インストール・パッケージを HTTP サーバーへ 29
パッケージ・グループ 22
必要な System z サーバー・ツール、インストール 61
ファイル・ハンドル、Linux コンピューター上での増加 47
フィーチャー 13
フィーチャー、インストール対象の決定 12
ブラウザー
前提条件 10
プリインストール作業 3
変更、インストール 53
方式、インストール 11
ポストインストール作業 39

【マ行】

メディア要件 5
問題、既知 63

【ヤ行】

ユーザー特権 10
要件
オペレーティング・システム 7
ソフトウェア 7, 9
特権 10
ハードウェア 7
ユーザー特権 10
要件、クライアント・インストール 5
要件、メディア 5

【ラ行】

ライセンス、管理 41
ライセンス情報、表示 44
ライセンスの使用可能化 43
リポジトリ、インストール 21
リポジトリ設定、Installation Manager
での設定 22

A

Acrobat Reader
前提条件 10
Adobe Acrobat Reader
前提条件 10

C

CARMA 15
Common Access Repository Manager
(CARMA) 15

D

DB2 Connect
前提条件 9
Developer for System z の概要 3
Developer for System z、概要 3

E

Eclipse IDE、既存の拡張 23

H

HTTP サーバー、インストール・パッケー
ジの配置 29
HTTP サーバー、リポジトリからのイン
ストール 12, 28

I

IBM Rational Developer for System z の開
始 51
IBM Rational Developer for System z のク
ライアント前提条件 6
IBM Rational Developer for System z の更
新 55
IDE、既存の Eclipse の拡張 23
Installation Manager 17
Installation Manager、アンインストール
21
Installation Manager、インストール 18
Installation Manager、開始 20

Installation Manager、リポジトリ設定
22

L

Linux コンピューター、ファイル・ハンド
ルの増加 47

P

Packaging Utility 65
Prerequisites for IBM Rational Developer
for System z の前提条件、クライアント
6

R

Rational Developer for System z、アンイ
ンストール 57
Rational Developer for System z、開始
51
Rational Developer for System z、クライ
アント前提条件 6
Rational Developer for System z、更新
55
Rational Team Concert for Integration 拡張
機能、インストール 62

S

SCLM Developer Toolkit 13

T

Toolkit, SCLM Developer 13
TXSeries
前提条件 9

W

Web ブラウザー
前提条件 10



Printed in Japan

GI88-4129-09



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21